

研費・基盤研究 A

「天体景観への認知と祭祀および暦の生成に関わる考古天文学の展開」
(23H00021)

「アイヌ民族の宇宙観研究のためのデータベースの構築①」

「北海道のろうそくもらい行事を対象とした天文民俗の文化
伝搬に関する調査」および「七夕民俗調査」

研究成果報告書<2023 年度>

令和 6 年 2 月 26 日

今野利秋

第一章 本年度の調査の概要

1. 第二期にあたって

研究の主軸は、アイヌ民族の星の文化の理解とその宇宙観を解釈することとし、調査は、そのために必要な資料や事例の収集を中心に据える。さらに、北海道独自の七夕行事である「ろうそくもらい」の伝播に関する調査、それを補完或いは類推・傍証するための日本の七夕の民俗の調査も、第一期からの継続事項として並行して進めていくこととした。

(1) アイヌ民族の宇宙観研究のためのデータベースの構築①

アイヌ民族の宇宙観を研究するためには、基礎的なデータとして、彼らの星や天体の名前、神話や伝承、民俗的行為などの事例が数多く必要であるが、それらを検索・参照することのできるデータベース的なものは存在していない。そこで今期は、事例を可能な限り収集し、データベース化することを研究の目的の一つに据えた。本来であれば道内各地のアイヌ民族の方々を訪問しての聞き取り調査が有益なのであろうが、北海道は広大であり、アイヌ文化と言っても非常に多様である。道内各地のアイヌ文化圏を訪ねての調査は、四年間の限られた時間と人員では一定の成果を上げることができるかどうか疑わしいという時間的かつ物理的な問題がある。また、本業の傍らで調査を行っている立場としても、現実的ではない。そこで、文献から事例を拾い上げていくことを基本的な調査手法に据えることとした。詳しくは第二章で記載する。

(2) 北海道のろうそくもらい行事を対象とした天文民俗の文化伝搬に関する調査

北海道独自の七夕行事である「ろうそくもらい」のルーツを探る調査は、第一期においてはコロナ禍と研究期間が不幸にして重なってしまった結果、子どもたちが主体の行事である「ろうそくもらい」そのものが行われなくなってしまった。ようやく第一期の最終年に、知人の家で行われた小規模な「ろうそくもらい」を訪ねることができたのみであり、新聞記事や先行研究の文献にあたるといった机上での調査がほとんどであった。第二期初年の本年度は、コロナが五類に移行したことで行事が実施されるようになった。ネット上や町内会関係の所管部署に照会するなどをして、札幌市内での実施情報を入手。ご厚意で、行事の開始から終了までを一緒に歩いて見学をさせてもらうことができた。また、北海道開拓の村において北海道の七夕の展示を見たり、学芸員に話を伺うことができたりするなど、第一期に比べて成果のあるスタートとなった。合わせて、ルーツとしての疑いがあると考えている祇園祭でも、コロナ明けで子どもたちがわらべ歌をこれまで通りに歌うようになり、その調査も行うことができた。詳しくは第三章で記載する。

(3) 各地の七夕民俗調査

第一期では「ろうそくもらい」の調査と並行して、内容の比較や類似事例を見つけるために、日本国内各地の七夕民俗調査も行っていた。第二期においても、同様の目的のために調査の継続が必要と判断。富山県の七夕行事の調査を行った。第一期は七夕行事そのものであったが、今期は直接的に七夕行事ではなくても、内容や形態、意味合い等が七夕と類似している民俗行事についても調査の対象を広げる。第一期の最終年度である 2022 年

度にも、その萌芽となる試みを実施しようとした。しかし、コロナ禍で行事が中止となったり、来訪は遠慮願いたいとの回答が来たりするなど、対象としたほとんどで調査を断念せざるを得なかった。コロナ明けの今年度は、まず、そうした行事である栃木県と静岡県での調査を実施した。また、千葉県の野外民俗博物館を訪ねた折に、七夕綱に似た民俗行事を見つけるなど、周辺部の調査を実施している。詳しくは第四章で記載する。

2. 調査日程

(1) アイヌ民族の星の文化調査

1) 道内の博物館等での調査

5月7日

- ・北国博物館（北海道名寄市字緑丘 222）
- ・なよろ市立天文台（北海道名寄市日進 147-157-1）

5月8日

- ・北方野草園／嵐山公園センター（北海道上川郡鷹栖町嵐山）
- ・川村カ子トアイヌ記念館（北海道旭川市北門町 11 丁目）
- ・旭川市科学館（北海道旭川市宮前 1 条 3 丁目 3-32）

2) 図書館での文献調査

4月と8月

- ・札幌市中央図書館（北海道札幌市中央区南 22 条西 13 丁目 1 番 1 号）

定期的に

- ・東京都立中央図書館（東京都港区南麻布 5-7-13）

(2) 「ろうそくもらい」の調査

1) 札幌市内の町内会での調査

8月7日

- ・札幌市中央区南円山地区 啓明町内会
南円山まちづくりセンター（北海道札幌市中央区南 9 条西 21 丁目）

2) 博物館での調査

8月7日

- ・北海道開拓の村（北海道札幌市厚別区厚別町小野幌 50-1）

3) 図書館での文献調査

1月、4月、8月

- ・札幌市中央図書館（北海道札幌市中央区南 22 条西 13 丁目 1 番 1 号）

1月

- ・市立小樽図書館（北海道小樽市花園5丁目1番1号）

4) 伝播及びルーツ検証の調査

7月15日—17日

- ・祇園祭（京都府京都市中心部）

7月22日

- ・吉久重要伝統的建造物群保存地区（富山県高岡市吉久2丁目・3丁目）

7月23日

- ・勝興寺（富山県高岡市伏木古国府17番1号）
- ・伏木気象資料館（富山県高岡市伏木古国府12番5号）
- ・伏木北前船資料館（富山県高岡市伏木古国府7番49号）
- ・伏木神社（富山県高岡市伏木東一宮17番2号）
- ・山町筋重要伝統的建造物群保存地区／菅野家住宅（富山県高岡市木舟町など）

(3) 各地の七夕民俗調査

1) 千葉県での調査

3月19日

- ・千葉県立房総のむら（千葉県印旛郡栄町龍角寺1028）

2) 静岡県での調査

5月27日

- ・由比北田の天王船流し報告会
由比生涯学習交流館 多目的ホール（静岡県静岡市清水区由比北田457-1）

3) 栃木県での調査

7月2日

- ・思川の流しびな
観晃橋下流思川河畔（栃木県小山市）

4) 富山県での調査

7月22日

- ・荒木のねつおくり祭り（富山県南砺市荒木地区）

第二章 アイヌ民族の宇宙観研究のためのデータベースの構築①

1. はじめに—アイヌ民族の星の文化と末岡外美夫氏

(1) 末岡外美夫氏という存在

アイヌ民族の星の文化の研究について語る時、欠くことのできない業績を残した人物がいる。それは、末岡外美夫氏である。1931年、旭川市に生まれ、旭川中央国民学校で義務教育を修了。福山航空機乗員養成所六期生となり、海軍上等飛行曹として戦地に赴き終戦を迎える。その後、旭川中学（現旭川東高校）を卒業後に小中高大学の教員及び（財）日本私学教育研究所専任研究員を経て諸外国を遍歴された。日本大学助教授、カリフォルニア大学講師、マサチューセッツ工科大学非常勤講師の職に就かれたこともある。（※末岡氏の著書と北海道新聞連載の経歴より作成）

末岡氏がアイヌ民族の星の文化調査を始めたきっかけとして、元旭川市立天文台長の堂本義雄氏が「昭和二十五年夏、旭川市常盤公園に開催された「北海道開発大博覧会」に特設館として設置された「アイヌ民族資料館」で、折から天文台を訪問された小森幸正氏、天文台建設に来旭中の小島修介氏それに著者等と共に、アイヌ人の資料を前にして、「アイヌ民族の見た星の事を調査できれば、興味深いものがあるはずだが。」という話が出たのが、きっかけのように記憶している」と振り返っている（末岡外美夫『アイヌの星』旭川叢書第12巻、旭川振興公社、1979年、p3）。

(2) 末岡氏の著作物

末岡氏の果たした役割は何と云っても、調査当時、すでにアイヌ民族の中でも失われつつあった星の文化に関する伝承や事例を聞き取り、記録に留め、著書にまとめた事である。そのおかげで、今日、私たちはアイヌ民族の星の文化の一端をまとまった形で垣間見ることができるのである。現在、確認できている末岡氏の著作物は発表年代順に以下のとおりである。★マークは自分が内容を確認できているものである。この中で現在、アイヌ民族の星の文化について語る時に、必ずと言って引用・参照されるバイブル的な存在となっているのが、⑥と⑧である。

①「アイヌ人と星」（『旭川天文研究会 天文図報3号』）、1951年

②「惑星の旧愛乃名」（『THE SKY 7号』）、1954年 ★

③『北方の神話と星』A・オルト、佐藤昭一（共著）、1955年

④「日食に因むアイヌの伝説」（『北海タイムス』）、1958年

⑤「アイヌ民話と星」（『日本大学第二高等学校研究 集録4』）、1962年

⑥『アイヌの星』旭川振興公社、1979年 ★

⑦「北の星」（『北海道新聞』上川版）、1982年9月～1983年7月 ★

※「秋」「冬」「春」「夏」編をそれぞれ20回、計80回連載

⑧『人間達（アイヌタリ）のみた星座と伝承』末岡由喜江、2009年 ★

(3) 末岡氏の業績の波及

1) 野尻抱影氏を介した一般への普及

末岡氏は星の和名の収集・研究で知られる野尻抱影氏に調査研究の成果を送っており、野尻氏が著書の中で、アイヌ民族の星の文化として紹介をしている。それ以前にもアイヌ民族の星の文化について書かれている書籍類はあったが、専門書や論文、或いは江戸や明治時代の書籍等であり、一般に普及される類のものとは言えなかった。影響力の大きかった野尻氏の著書を介することで、アイヌ民族の星の文化の存在が、ジョン・バチエラー氏、内田武志氏といった先行事例と合わせて、より広く一般の星の愛好家にも認知されたと言える。末岡氏による野尻氏への情報提供は結果として、文化の存在を広めることにつながっているのである。

2) 天文普及現場での活用

アイヌ民族の星の文化が紹介される際、『アイヌの星』『人間達（アイヌタリ）のみた星座と伝承』（以降『アイヌタリ』）が引用元となるものがほとんどであることは先述した。この二冊は、それまでの末岡氏の調査研究の集大成であり、現在、この二冊をしのぐようなアイヌ民族の星の文化をまとめたものは見受けられない。その事で、必然的に引用元とならざるを得ないという実情もある。引用の主な事例としては、星にまつわる書籍を出している出版業界、テレビ番組で紹介をする放送業界、イベントや講演などのテーマとして扱う博物館やカルチャーセンターなどの教育・生涯学習分野などが挙げられる。加えて、とりわけ事例が多いのがプラネタリウム業界である。プラネタリウムでは季節の星空を解説したり、星にまつわる神話や民話について話をしたりすることが多い。日本では西洋由来、特にギリシャ神話が語られることがほとんどなのだが、アイヌ民族の星の文化について触れられることは皆無ではない。解説員の言葉によるリアルタイムでの生解説、或いは番組、関連する講演や展示等でアイヌ民族の星の文化について語られることが多い。プラネタリウムでの事例は最近増えてきている。

3) 様々な媒体での露出

プラネタリウム同様に、ここ数年、テレビや雑誌等でアイヌ民族の星の文化が紹介される事例が増えてきている。NHKは“アイヌ民族の星”と“八重山の星”を紹介した番組「コズミック・フロント」を放送。その北海道内ローカル版の「北海道々」では、内容をアイヌ民族の星の文化に限定して、末岡氏自身にもより深くスポットを当てていた。道央のニセコ町では関連した朗読イベント、道内の標津町では人類学的な見地からの移動プラネタリウムが行われたりしている。天文雑誌「天文ガイド」での科学館職員による連載も進行している。海外に目を転じれば、スミソニアン博物館での光害をテーマにした展示で、アイヌ民族の星にまつわる神話が映像化された事例もある。現在、発刊・放送・投映されている二次的著作物が基本的に、『アイヌの星』や『人間達（アイヌタリ）のみた星座と伝承』に記載されている事例を参考・引用したものなのである。それだけ、末岡氏の影響力は大きいのである。

2. 末岡氏の著作に向かうにあたって

末岡氏の著書や業績が、アイヌ民族の星の文化を語る時に欠かせぬものであり、影響力が大きいことは述べた。それゆえに、末岡氏の著作物に向かい、その中身を紐解き、参照し、引用する際にはいくつか注意すべき点があると考えられる。

(1) アイヌ民族の星の文化の地域性

末岡氏は同時代の古老を訪ね歩いて道内各地を歩き、話を聞いて星の記憶を記録した。しかし、当然ながらそれは道内のすべてのエリアではない。北海道は広大であり、暮らしている土地の気候や風土を反映した地域差があり、ひとくくりにして述べるできない多様性を持っている。星の文化も同様であることは末岡氏も十分認識されていた。『アイヌの星』と『アイヌタリ』でも、一つの星の名前に対して異なる呼び方が異なる地域で存在している事例も紹介されている。両著書共に採集した地域が記載されている。

こうした地域性を無視して、ある地域の事例をもって、「アイヌ民族の星の文化では、このように呼ばれている」と紹介するのは危険である。少なくとも事例が複数ある場合には、「この地域ではこのように呼ばれていて、他の地域でも異なった呼び方がある」事を注釈するのが望ましいであろう。

(2) 末岡氏の選別のフィルター

末岡氏は採集した事例すべてを著書に収録しているわけではない、という事実にも注意すべきである。末岡氏は、ある事例を採集した人だけでなく、その血縁者など、その事例を知っている人物を複数人求めている。かつ、他の地域での採集結果を照らし合わせたりするなどのクロスチェックを経て、確実性・信頼性が高いもののみを選別して掲載している。このことは、『アイヌの星』p328、『アイヌタリ』の目次前にある「本書を読まれる方に」に明記されている。末岡氏が出会っていない事例ももちろん多数あろう。加えて、選別の過程でふるい落とされたものも存在していることは、頭にとどめておくべきである。当然のことであるが、「著書に記載がない事」と「ある星や星座に関する呼び名が存在しない事」はイコールではないのである。

収録されなかった星の文化の事例は、末岡氏のノートやカードに記載されていると、著書の中にかかっている。『アイヌタリ』を発行された奥様の由喜江氏に確認したところ、「以前はそういった類のものはあったが、故人となった今では所在が分からない」とのことであった。ふるい落とされた事例が、時を経た現在の視点で眺めれば価値のある貴重なものである可能性は十分にあり、一次資料としての末岡氏のノートやカードが不明となったのは大変に残念である。ただ、『アイヌタリ』の原稿は残っているとのことなので、その推敲やメモなどの記載から何かしら読み取ることができるかもしれない。可能であれば、この科研の研究期間内に、札幌にある末岡氏のご自宅に奥様を訪ねたい。

(3) 末岡氏の掲載基準の変化

末岡氏は、確度や信頼性を慎重に検証した結果として、採集した事例を掲載する際の基準となる数段階のレベルを設けている。『アイヌの星』では、原則として、確度の高い順に上から2番目のレベルまでの星を紹介している。そして、捨てるには惜しいという注釈

の元に、3、4番目のレベルの事例からいくつかを最後の章で紹介している。しかし『アイヌタリ』では、上から3番目のレベルの星もメインの項目の星として特に注釈無く収録されている。時を経る間に基準が緩くなっているように見受けられるが、その理由は不明である。『アイヌの星』が「筆者の意に添わない出版物として世に出た」と『アイヌタリ』のはしがきで述べていることから、不本意であったものを見直した結果というだけのことかもしれないが、二冊を比較するとダブルスタンダードのように見えるのが気になる所である。しかし、一度はふるい落とされた事例が再び採用されたおかげで、より多くの星の文化が現在の私たち目に触れられるようになっているのも事実である。

(4) 末岡氏の理解や訳の妥当性

採集された事例は、当然、末岡氏の中でアイヌ語から和人の言葉への置き換えが行われているが、末岡氏はアイヌ語の専門家ではない。訳の正しさや聞き取りについての理解の精度の検証も必要である。多摩六都科学館のプラネタリウム解説員によれば、アイヌ語の専門家に監修をしてもらおうと、末岡氏の訳が時に正確性を欠いていることがあり、プラネタリウムで放映の際には「末岡氏の著書にはこう書かれているが、こういう風に訳すのがより妥当である」という注釈をそえて解説をされているとのことである。また、プラネタリウム番組の制作に関わりスミソニアン博物館の展示映像の制作にも関わられた国立アイヌ民族博物館の学芸員の方も、「末岡氏独自の解釈が紛れ込んでいたり、採集された地域と他の地域との混同も見受けられたりすることもある」とおっしゃっていた。末岡氏の著書の訳の妥当性については一度、全般的に専門家の目で判断をしてもらう必要がある。

3. 「跡を継ぐもの」の不在

アイヌ民族の星の文化の紹介や活用事例が近年増えており、その元となっているのが末岡氏の著書である事は先述した。どの事例においても末岡氏が引用元となるという事は、それだけ彼の業績が大きいことを物語っている。しかし同時に、末岡氏に続く研究者と手にとることのできる形での成果物が存在していないことの裏返しであるともいえる。事実、末岡氏に続くアイヌ民族の星の文化について調査研究をする専門家が、現状では不在である。アマチュアでアイヌ民俗の星の文化を研究し普及されている方、プラネタリウムで紹介をされている科学館の職員などはいても、末岡氏の著書からの引用が中心である。先述の国立アイヌ民族博物館の学芸員の方も、やはりその知見は末岡氏の業績に負うところが多い。科研のメンバーである天文民俗班には、星の和名を訪ねて各地を廻っている北尾浩一氏がおり、アイヌの方々に聞き取りをされたこともある。しかし、ご本人がおっしゃられていることではあるが、アイヌ民族の星の文化の専門家ではない。

この専門家の不在によって生み出されている状況がある。『アイヌタリ』が出版されたのは2009年ではあるが脱稿は1980年である。これ以降、アイヌ民族の生きた星の文化の収集が、定まった明確な視点に置いて系統立てて行われていないということである。北海道教育委員会などの民俗的な調査によって、星の文化に関連する事項が聞き取られて記録されてはいるが、各報告書に散在してしまっている。『アイヌタリ』以降の調査結果等が、広く一般の人が接しやすい形でまとまっていないのである。この40年余のアイヌ民族の

星の文化についての記憶と記録が、広く一般に普及する機会を失って埋もれてしまっているのは非常に惜しむべきことである。

4. この科研で目指すところ

末岡氏の著作物に記された星の名前や伝承は、同時代を生きた道内各地での古老からの聞き取りによるものが中心ではあるが、その時点での過去の事例については文献からの引用である。末岡氏によると、17世紀（寛永年間？）の『松前の言一糸そことはの事』の「里（り）いこ ほしの事」というのが、アイヌ語の星を意味する単語が初めて和人の書物に掲載された事例であろうとしている（『アイヌタリ』p104）。『アイヌタリ』が脱稿された1980年は『松前の言』に始まるアイヌ民族の星の文化調査研究史において、一つの集大成が行われた年と言える。この年以降、専門家の手による継続した星の文化の収集が行われておらず、民俗的な調査研究の成果に含まれる星の文化に関連する記載が散在しており、それが問題点であるということは先述した。そこでこの科研において、空白の40年余りを可能な限り埋めていくために、散在している事例をできるだけ発掘し、それらから得られた事例と末岡氏の著書の事例をすべて一覧化・マッピング化し、末岡氏の業績を今一度再構築・再評価することにつなげていくことを試みようと思う。なお、今期は天文民俗班のメンバーである古屋昌美氏との共同作業の部分もあり、その担当部分については古屋氏の報告書にゆだねたい。

（1）末岡氏の「ビフォー」「アフター」からの再発掘

末岡氏が『アイヌタリ』を脱稿した1980年を一つの集大成の年と考えるならば、それは同時にアイヌ民族の星の文化研究史における一つの大きな節目と位置付けることができる。そこで、研究史を1980年以前の「ビフォー」と以降の「アフター」という二つの時期に分けて考えていく。

1) 「ビフォー」

この時期の調査研究に関しては、『アイヌの星』と『アイヌタリ』の二冊と、二冊の本文中で引用されたり参考文献として記載されたりしている文献類を基本資料として考える。二冊に掲載されている文献類は表1（本章の最後に掲載）にある様に全213点確認できている（重複と思われるものも現時点では残してある）。ここには『アイヌタリ』と北海道新聞の連載が含まれていないので、加えれば総数215点となる。現時点では文献の一覧の作成を行った段階である。次年度以降はできるだけ末岡氏の著作物の一次資料としてこれらにあたり、星や天体に関する記載を拾い上げ、最終的には一覧としてまとめることを目指したい。そして、2-（2）で述べた末岡氏のフィルターをできるだけ外して、著作物に未記載の事例が発掘できればと思う。また、資料の中には、アイヌ民族の暮らしや民俗、和人とのかかわりなどの説明のために引用・参考文献とされたものもあるので、最終的には資料の種類のカテゴリ分けも行えればと思う。1-（2）に記載した、末岡氏の手による著作物にあたるのは必須であると考えている。215点の資料の一部は、国会図書館などのデータベースでヒットしないものもあるが、末岡氏の蔵書としてご自

宅に存在する可能性がある。『アイヌタリ』の原稿の確認と合わせて、できれば末岡氏のご自宅を調査目的で訪問をしたいと考える。

「ビフォー」の中で一つの試みとして考えているのは、現存のアイヌ語辞典（明治・大正期に採取しているもの中心に）から星など天体に関連する単語を抜き出し、それらを末岡氏の著書内に記録のある星名や国立民族博物館アイヌ語アーカイブと照会することである。採集者が天文知識を持ち合わせていないため、実際にどの星を指す言葉なのか同定できないまま挙げられているものも少なくなく、「星」そのものを指す言葉だけでも多岐にわたる事例などが見受けられるためである。現時点で『北海道あいぬ方言語彙集成 東北海道編（吉田巖・小学館）』『アイヌ語方言辞典（服部四郎編・岩波書店）』の抽出しが終了しているが、この2点だけでも末岡本に記述のない星名や検証のできない星名があることが見受けられる。アイヌ語方言辞典に関しては、道内及び樺太・千島もあわせ 10 か所の方言が記述されているため、他の辞書と合わせて調査を進めていくことで地域による差異や変化も検証していくことができると考えられる。辞典に挙げられた語彙の検証はおそらくこれまで行われていないと思われる。こちらは主として発案された古屋氏が担当となって進めて行く。この段落の文章も氏によるものである。

2) 「アフター」

今年度は、散在している資料を図書館やインターネット等から情報を収集するという手探りの状態で進めて、リストを作成している途中である。発掘した文献類の中には、「ビフォー」時代の成果からの引用など旧知の事例もある。一方で、「ビフォー」の時期に刊行されているにもかかわらず、末岡氏の 215 点に含まれていないものも存在する。末岡氏が意図的に外したのか、或いは存在を知らなかったのかは不明である。それらの文献類は、刊行の時期的には「ビフォー」ではあるが、「アフター（末岡氏未記載）」として扱う。最終的には、「アフター」に出された星の文化の記載がある文献類と、抜き出した記載を一覧化する。さらに、それらの記載が既知のものか、末岡さんの著作物に記載・未記述であるかどうか、まったく事例のない記載であるのかという分析と分類も行っていく

初年度で尽力しているのは、北海道教育委員会によるアイヌ民族の民俗文化調査報告書のシリーズである。最初の報告書の刊行は 1968 年であり、1975 年の報告書は末岡氏も参考文献としている。しかし、大半が「アフター」の調査・刊行であり、そこには星の文化についての記載を確認できている。このシリーズは現在も毎年刊行されており、本報告書を作成時点では総数が 184 冊あり、今年度中には調査を終える予定である。

(2) 得られた事例のマッピング

得られた事例は、末岡氏の著書の再構築の意味合いもかねて、記載・未記載のものをすべて一覧化（エクセルなどを用いてのデータベース化）するが、その際、①星や星座・天体ごと、②地域ごと、の二つの分類は最低限行っていく。①はアイヌ民族の星空の見方を考察する際の材料として有益なインデックスとなろう。②に関しては、アイヌ民族の星の文化の地域性を考えていく上で有益となる。最終的には Google マップ上にマッピングして可視化することを試みる。アイヌ文化の地域性と重ね合わせて、星の文化の地域性や分

布を考えていくうえで非常に有益だからである。

特に、古屋氏が試みている辞書からの単語の抜き出し事例は、一つの天体を示す言葉の地域差、つまり「方言」を検証するうえでも有益であると考えられる。事実、「星」を示す単語がわかっているだけでも4, 5種類あるし、同じ星や星の並びであっても、地方で呼び名が異なる事例がある。マッピングによって、こうした地域別の分布が直感的にわかりやすくなることが大いに期待される。

(3) 合わせて臨みたいこと

1) 神話や伝承の整理

『アイヌの星』と『アイヌタリ』を見て気づくのは、掲載されている星や天体についての神話や伝承類に限られているということである。これらの分野については、更科源蔵氏の著書や『日本昔話通観』（稲田浩二・小沢俊夫編、同朋舎出版、1989年）等、いくつもの文献に散在している。これらの事例も極力リストアップができればと思う。アイヌ民族の世界観や宇宙観、あるいは同じ伝承での地域差を考える場合、これらの情報も揃っていることで総合的に考えることができるからである。

2) 世界観や宇宙観の事例研究

抽出した事例から、アイヌ民族の世界観や宇宙観を推察していくことも視野に入れている。具体的には以下の二つである。

- ・日食や月食の際の祈りや踊りやあるいは神話を通じて、太陽や月という存在についての認識、月と太陽との関係についての認識を考える。2030年には北海道内の大部分で見られる金環日食が起こるので、日食への興味関心を高める流れと上手く絡める形で、北海道内における天文資産としてアイヌ民族の星の文化を広く知ってもらえることにつながればとも考えている。
- ・道内には星が落ちたことや輝いていることを示すアイヌ語地名が数か所あり、伝承もある。その正体がなんであるのか、可能であれば現地を訪ねてみたいと思う。地上の何を見て、どのような認知の過程で空に光る星になぞらえたのか。そう表現するに至るランドスケープ的な何かがあったのだろうか。天文民俗班では国内の隕石や星が落ちた伝承の調査も考えており、その一環として連動をしていくつもりである。

5. 今年度のアイヌ民族の星の文化に関する調査

(1) 北海道内の博物館等での調査内容

今期のアイヌ民族の星の文化に関する調査の目標は定まった。まずは、末岡氏の研究の足跡を追いつつ、彼が聞き取りを行ったエカシに関する展示等を見ることを主な目的として関連する地に赴いた。

1) 北国博物館（北海道名寄市字緑丘222）

名寄市は、北風磯吉氏というアイヌ民族の方がお住まいになっていた土地である。軍

人や農民として大正、昭和を生き抜き、古いテシオアイヌの最後の文化伝承者として、多くのアイヌ語や民族調査に協力し『分類アイヌ語辞典』『アイヌ語方言集』などの書物の成立に貢献した。アイヌ民族の星の文化について聞き取りをするには格好の人物であり、末岡氏も 1951～52 年にかけて来訪している（『新名寄市史第一巻』、1999 年、p647）。彼の生誕地である名寄市の北国博物館には展示コーナーがあるので、見に行くこととした。星の文化関連についての記述は残念ながらなかったが、学芸員の方より北風氏の資料集に関連する記載があるということで、pdf として情報を提供いただいた。今期の調査は、事例を多く集めることであるので、ここに関連箇所を引用する。

◆佐藤幸夫『北風磯吉資料集 アイヌネノ・アン・アイヌ(より人間的である人間)』
(名寄叢書、第 6 巻)、市立名寄図書館、1985 年 の p131、132

(26) 日食の祈り

器に清水を汲んできて、その水をイナウや笹で天に向って振り掛け心の中でチュプカムイの回復を祈るだけで、別に声を出して叫ぶようなことはなかった。

日食のとき叫ぶ呪文 (?) の中には、次のような例 (宗谷, 名寄)

cup kamuy 太陽のカムイ
eatu 吐き出せ
eatu 吐き出せ
hoy hoy ホーイ ホーイ

多少の差異はあっても日食の呪や祈詞は、大体上にあげた程度のものである。『アイヌの星』

[昭和 11 年 6 月 19 日の皆既食の時のことだと思われるが、尾沢カンシャトク氏は、『北海道文化財保護功労賞、受賞記念誌』に、次のように書いている。]

戦前のことになるが、アイヌは日食の時に悪神払いの儀式があることを知った。だがどのようなカムイノミをやり、どのようなことをやるのか知っている人がなかなか見つからなかった。だがちょうど昭和 9 年の日食の時に名寄アイヌ最後の大しゅう長である名寄在住の北風磯吉エカシがこの儀式をやるというので名寄にかけつけ、それに参加すると同時にいろいろ教わってきた。

(当時の様子を次のように語った。)

日食になり、北風さんが屋根に登り右手にエムシ (刀) を持って上下に上げ下げし (刀先を上に向ける)、フチは家の中でまな板を棒で叩いているのを見た。「昭和 46 年 11 月談話」

(27) 星

ポロ・ノチウ (小熊座)
poro nociw <poro (大きい) - nociw (星)>

ポロフレケタ（蝸座）

poro.hureketa 〈poro（大きい）- hure（赤い）- keta（星）〉。

ホテレケリコブ

hoterekerikop 〈hot（二十）- tere（待つ）-ke（させる）-rikop（星）帆待ち星〉。

（注 ho - terke - rikop（尻で - とぶ - 星=流れ星のことか?）

宗谷の人びとは早朝にこの赤星が西空に懸っているのを見て舟の仕度に入ったといわれている。ホテレケあるいはホツテレケは「二十日待たされる」という意味合で、ホテレケリコブが暁の西空に輝くのが四月末、それから二十日ほど経た五月下旬になってはじめて出漁したり、航海に出掛けたと伝えている。一方北風磯吉翁は「この赤星がタ方の南空に見えるようになると、弁財船が出て行く」と聞かされたという。

以上のような記載があり、日食の際にアイヌの人々が太陽の復活を祈っていることがわかる。他の文献調査からも、日食や月食への祈りの例が見受けられ、宇宙観を考察する良い材料となる。星の名前が三つしか挙げられていないのは、北風氏が知らないだけなのか、天塩地域での星の伝承が少ないのか、この事例だけでは何とも言い難い。ただ、ホテレケリコブについての記述からは、アイヌの人々が、暦として天体を見ていたことを示していると言えよう。暦として機能している星も、分類項目の一つとして設けて、どういった星がどの時期に役に立っているのか等の分析を行っていきたい。こうして得られた事例は最終的に、データベースとして一覧に加えていく。



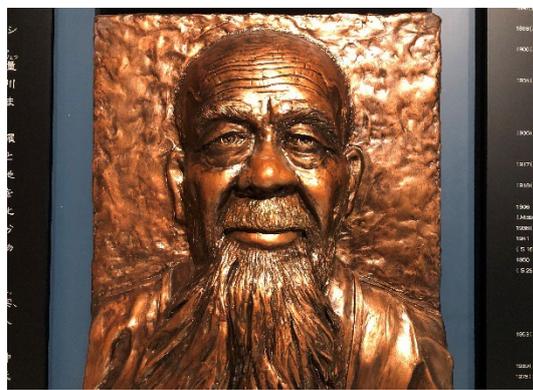
北国博物館



北風磯吉氏の展示コーナー

五十円寄付		
1906 - 1941 (M39)(S16)	26-	・名寄町内瀬にて農業に従事する、冬は達材山にて働く
1938(S13)9.9	58	・妻・ウシ遊春
1941 - 1950 (S16)(S25)	61-	・名寄町日進10線の山中で炭焼きをする
1950 - 1965 (S25)(S40)	70-	・主にこの間天塩川筋や名寄地方のアイヌ文化全般の伝承者として多くの研究者の学術調査などに協力する（末岡外美夫、河野広道、知里真志保、更科源蔵、瀬川清子、服部四郎、木村彰一、早川昇、田村すず子各氏他）

多くの研究者に協力。末岡氏の名前もある



北風磯吉氏

2) なよろ市立天文台（北海道名寄市日進 147-157-1）

この天文台は、道立名寄高等学校の教諭であった故木原秀雄氏による私設の木原天文台がルーツである。木原天文台は 1992 年に名寄市に寄贈されて名寄市立木原天文となり、2010 年に現なよろ市立天文台が新設されるにあたって閉所された。現在の天文台には、木原天文台時代を振り返るコーナーがある。他にも一般公開されている天体望遠鏡やデジタル映像を投映するプラネタリウムなどを備えている。この施設に 2023 年春に採用された職員の T さんが、アイヌの星に関して卒業論文を書いており、作成の際に微力ながら協力をしたことがあった。T さんは、地元のアイヌ民族の星の文化をプラネタリウムのコンテンツ化することを目標として、この天文台に就職を決めた経緯がある。天文台の M 台長同席のもと、今後の天文台でのコンテンツ化の展望について話を伺った。

- ・アイヌ語の発音、監修について北大アイヌセンターの教授にお知恵を拝借
- ・北国博物館とも連携をしている
- ・末岡氏の記載そのものの妥当性や検証が必要
- ・多摩六都科学館の N さんとも連絡を取って問題点を共有している

とのことで、現状では、アイヌ民族の文化の紹介は非常にセンシティブな問題でもあり、下準備をして用意周到にコンテンツ化を進めていくとのことであった。今後の展開に期待したい。



なよろ市立天文台



木原天文台時代の歴史を振り返る展示

3) 北方野草園／嵐山公園センター（北海道上川郡鷹栖町嵐山）

ここで少し私事となるが、自分は今は仕事の都合で東京に在住であるが、北海道に生まれて育った生粋の道産子である。そんな私にとって、アイヌ民族やその文化は距離が近い存在であった。北海道で多くの時間を過ごしたのが、末岡氏が住まわれていた旭川市であった。市の南西部には近文というアイヌ民族の人々が多く居住する地域があり、他よりもアイヌ民族の文化がより色濃くある街で育ったと言えるかもしれない。小学校の社会科では、副読本で郷里の歴史を本州メイドの教科書とは別に学ぶ機会もある。それでアイヌ民族の文化や歴史に精通していることなどは決してなく、漠然と、アイヌ民族という先住民が北海道にはいて、いわゆる和人やシャモが土足で入ってきて開拓をして居住地を広げていく一方で、アイヌ民族は住む地域などを不当に割り振られるなどし

ていった。そして差別的な扱いが続いている。そんなことがあるという理解を漠然としていた。もっとも、当時、1980年代は先住民族という言葉も概念も日本国内では一般的ではなく旧土人法が存在していたし、アイヌ文化もどちらかという観光地での見世物の側面も多かったように小、中学生の頃は感じていた。そんな自分が、最初にアイヌ民族の星の文化と出会ったのは高校に入ってからのこと。ちょうどハレー彗星が回帰して世の中が天文ブームであったことや、ボイジャー探査機の驚異の映像やテレビ番組「コスモス」などに刺激されていたことも相まって、星を見上げ始めたばかりの頃であった。その時の星の名前は、西洋星座やギリシャ神話の系統であり、興味を持って星座の本を読み進めていくうちに、世界各地の民族の民俗や文化に於いて異なる星の文化がある事を知るに至った。恥ずかしながら、そこに、日本固有の星の和名、アイヌ民族の星の文化、沖縄や八重山の星という最も身近な国内にある星の文化についての認識はまるでなかった。そんなある日、自分が星好きである事を知っていた同級生から新聞の切り抜きを渡された。北海道新聞という地元では圧倒的なシェアを誇るブロック紙の、当時自分が住んでいた旭川市エリアを中心とする上川地方版の連載であった。それは、アイヌ民族の星の文化を中心とした北海道の視点で書かれた天文記事であった。季節ごとに20回、計80回の連載であった。その筆者がほかならぬ末岡氏であった。

そんな自分にとって、北方野草園は馴染みのある場所であった。名寄の帰りに、目指す博物館まで時間があつたために久しぶりに訪れて、アイヌ民族の住居であるチセを訪ねた。自分にとってチセとは、この北方野草園にあるようなものであると思っていた。しかし二風谷を訪ねた時に、ヨシで作られたかなり立派なしつらえであったことに驚いた。旭川のチセは写真のように笹ぶきだからである。これは、各地の植生に応じてチセの作り方や材料が異なっているためであり、アイヌ民族の文化の違いの多様性の一端の表れでもある。居合わせた職員の方によると、このチセは市内に住むアイヌの方々が制作されており、比較的新しいチセは昨年(2022年)吹き替えられたものであるとのこと。



再現されているチセ



2022年に作り直されたチセ

野草園の入り口にある嵐山公園センターはビジターセンター的な役割を果たしている施設である。野草園の植物の写真と解説パネルが展示されており、見学後の後学に役立つようになっている。その書籍コーナーに、アイヌ民族の伝承を扱ったシリーズものの書籍があり、その中に星や天文に関する話を3話見つけることができた。

- ・察美千子『イソイタク 第2巻』アイヌ民族文化財団、2015年
 ※「月に閉じこめられたなまけ者」の話が収録されている。語り部は、杉村キナラブックさん（1888年～1974年）旭川。出典は『昭和62年度アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズI アイヌ民話』藤村久和（訳註）、北海道教育委員会、1988年の「10 我が子を月に召される母親の物語」より
- ・察美千子『イソイタク 第4巻』、アイヌ民族文化財団、2017年
 ※「星になったサマイェクル」「群れ星になった乙女たち」の話が収録されている。語り部は、栗山国四郎さん（1882年～1956年・旭川）。『アイヌの星』と『アイヌタリ』にも収録されている。

「月に…」は月の模様について、「星になった…」は北斗七星について、「群れ星…」はプレアデス星団についての話であり、いずれもアイヌ民族の星の文化に関する伝承としてはメジャーなものである。このように話者と出典が明記されていると、現在流布している有名な話の出どころまでたどり着けるのがありがたい。今期の調査でどこまでできるかはわからないが、様々な文献に同様の話が収録されている時、その出典がどうであるのかも整理できればと考えている。

◆ノチュウという岩

嵐山公園センターから徒歩5分ほど、オサラッペ川と忠別川が合流する辺りに「ノチュウ」、アイヌ語で「星」を意味する名前の岩がある。この岩も昔から知っている存在ではあったが、アイヌ民族の星の文化と言う視点で見つめなおしに訪れた。伝説では、昔、空から星が降ってきて岩になったと言うが、科学的に岩の組成を調べた結果は隕石と無関係らしい。道内には他にも星が落ちてきたという伝承にまつわる土地や、星が輝く地であるという場所が何か所かある。実際に何か隕石らしきものの落下があったのかはわからない。不思議なことに、これらは道北から道東にかけてのオホーツク側に多いのである。地域差によって視点が異なっているのか？あるいは実際に隕石が広く一帯に降り注いだことがあるのだろうか？今期は、国内の星が落ちたという伝承地の調査も行いたいと考えている。アイヌ語におけるそうした土地もできれば実際に訪れて、地形や見え方の特徴に共通するものがあるのかどうか、といったことを調べられればと思う。



ノチュウ岩の由来についての説明版



川の中ほどにあるノチュウ

4) 川村カ子トアイヌ記念館（北海道旭川市北門町 11 丁目）

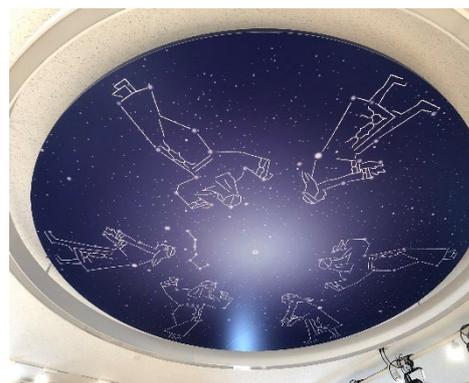
同記念館は、上川アイヌの首長川村イタキシロマ氏が 1916 年（大正 5 年）自宅を公開する形で「アイヌ博物館」を開設、その子息である川村カ子ト氏が測量の仕事で得た資金で拡充して「川村カ子トアイヌ記念館」として発展させた施設が元となっている。老朽化が進んでいたために、新館が旧館の隣に 2023 年に新設、7 月に正式にリニューアルオープンをした。日本最古で唯一の私立のアイヌ資料館で、アイヌ民族の文化や習慣を伝える生活用具など貴重な資料が数多く展示されている。川村カ子ト氏は長野県の飯田線の開通に尽力をした方であり、末岡氏がアイヌ民族の星の文化について聞き取りを行った古老の一人である。伺った 2023 年 5 月はプレオープンの位置づけで、展示などが完成ではないものの公開がされていた。施設の天井には明らかに北極星の周りを回って踊るウポポケタをモチーフとした意匠があしらわれていた。どういった経緯でこのようになったのか、運よく、副館長の川村久恵氏が見えられてお話を伺うことができた。

- ・ 末岡氏が川村カ子ト氏に聞き取りをされ、その成果が二冊の著書となっていることをご存じてあった。『アイヌの星』が施設の本棚にあった。
- ・ 旭川の科学館のプラネタリウムから投映のことでコロナ前に相談があった。その後は特に話はないとのこと。
- ・ 科学館などが興味を持ってもらっていることを思うと、アイヌ民族の文化として、星や天文について、本当は自分たちが情報の発信をして広めていくべきであるとの思いがある。多くの人に知ってもらいたい。そういう思いで天井のデザインをした。
- ・ 7 月 15 日の本オープンまでには、天井のデザインについて解説版を設置する予定。
- ・ いつになるかわからないが、星を語るタペなども実施したいとのこと。

とのことであった、情報交換を今後もお願いして名刺を渡し、後でフォローのメールを差し上げた。今後、アイヌ民族の星の文化を和人側ではなく、文化の当事者であるアイヌ民族側から発信していくキーマンであると思う。



新しくなった記念館



記念館天井はウポポケタのデザイン

5) 旭川市科学館（北海道旭川市宮前 1 条 3 丁目 3-32）

同科学館は 1963 年（昭和 38 年）に前身となる「旭川市青少年科学館」が市内中心部の常磐公園内に開館した。2005 年（平成 17 年）1 月 30 日をもって閉館。7 月 23 日に旭

川駅に近い北彩都あさひかわ地区に新築移転して「旭川市科学館 サイパル」として開館した。同公園内にあった旭川市天文台も合わせて新科学館屋上に移転した。常盤公園時代の旧科学館と天文台は、アポロの月面着陸の模型に心躍らせたり、初めて大型の望遠鏡で土星を覗いたりした、科学と天文の原典と言える場所である。新しい施設では展示室やサイエンスシアター、プラネタリウムを備え、天文台は口径 65 センチという道内でも大型の望遠鏡が設置されて市民に一般公開されている。科学館には、常盤公園時代の天文台の会報が保存されており、その第七号に末岡氏のアイヌ民族の星の文化の調査についての投稿が掲載されている。この会報に関しては、末岡氏も『アイヌタリ』の中で参考文献として挙げられている。その内容をここに要約して記載する。

- ◆ 「惑星の旧愛乃名」(『THE SKY 第7号』)、1954年 記載の星名を抜粋
※今野注：“ ”内は末岡氏の原文のままである

「火星」

フチ・ノチウ (Huchi-nochiu) 「火の星」 : huchi (n) 「火」 + nochiu (n) 「星」
“我々がこの星を色感的に火星と呼んで親しんでいるのと一脉相通するものがある”

「アンターレス」

①ポテレケ・ノチウ(Po-terek-nochiu) 「子どもが跳ねる星」:

Po- (Poho) (n) 「子供」 + terek (vi) 「跳ぶ」

“此の星が出る頃から子供達が夕方遅く迄遊んで歩く様になるから此の名があるのだと云う”

②テレケ・リコプ(Terek-rikop) 「跳ねる星」

rikop (n) 「星」: rik (adv) 「上に」 + o (vi) 「有る」 + p—名詞化

※今野要約：酔ったオキクルミが踊ろうと飛び跳ねて立つと、この星が赤くなって彼の酔いがさめたという。

★『星の美と神秘』(恒星社厚生閣、1946年)の「藻汐草」の記載に関し末岡氏の私論
“火星—ホテレケリコプ (Oterkerikop 飛び跳ねる星)となっているが、これはアンターレスと火星を混同した呼び名ではないかと思う”

「彗星」

クツ・ノチウ (Kut-nochiu) 「帯星」: Kut (n) 「帯」

“昔、此の星を見たと云う者が数人居り(平取)今は見られないと云う。年代から推して1910年に出現したハーレーではないかと思う”

★『星の美と神秘』(恒星社厚生閣、1946年)の「藻汐草」の記載に関し末岡氏の私論
“ノチウ・オマン(nochiu-oman) 「彗星」となっているが、oman (vi) 「sing 進む、逝く」の意から考えて流星の事ではないかと思ひ尋ねた所、幌延に仮住居を構へ稚内などに漁に歩く坂井氏(推定六十五位)が、この語を流れ星として伝承して居り、

これは星が休みに行く時に見られるのだと言う “

“サラコル・ノチウ(Sar-kor nochiu)「尾の有る星」となっているが、〈中略〉

昔コシヤマイン酋長が和人と戦を交えて愛乃人が敗れた時サラコル・ノチウが現われた。「私は青年の時此の星を見た(白老貝沢氏)」と言う談話から、これは〈中略〉

サラ・ノチウ(Sara (n)「戦争」(古代語に属する)、koro (vt)「有る、得る」

サラコル・ノチウ(戦の起る星)の意ではなかろうか “

「宵の明星 (金星)」

キムマチスラクル・ノチウ(Kim-mach-sura-nochiu)「山々に妻が影を落とす星」:

kim (n)「山々」+mach (n)「妻」+suru (n)落とす+kur (n)「影」

※今野要約: 狩りに出かけて帰らぬ夫を探しに、メノコは山を捜し歩いた。しかし力尽きてその魂がこの星となり、山々に可憐な影を落す様になったのだという。

★『星の美と神秘』(恒星社厚生閣、1946年)の「藻汐草」の記載に関し末岡氏の私論

“キムマチサクグル・ノチウ(Kim-machi-sak-guru「山上の独り者」)の意ではないかとも思われる。コタンの愛乃の人々は「独り者の星」と呼んでいたが、〈中略〉夕方西の空に一きは明かるく輝く一人者の金星にふさわしい呼び名だと思う “

「星食」

ノチウ・シカマレ (nochiu-shikamar)「星が隠れる」: Shikamar (vi)「隠れる」

“明るい星が月に隠される時は漁に出ないと言う(白糖地方)”

残念ながら、道内のどの地域で採集されたものなのかの記載が一切ない。ホテレケリコプが混同している名前ではないかと、会報では主張しているが、先述の北風磯吉氏はホテレケリコプという星の名前を伝承している。末岡氏は1951~52年に北風氏に聞き取りを行っているので、当然、この星の名前も出てきているのだと思うが、1954年の会報にはそういったことが書かれていない。何とも判然とせず、こういう時に採集したときの生データとしてのメモやノート等までさかのぼりたいと思うのだが、先述のように失われてしまっている以上は仕方がない。

(2) 図書館での文献調査内容

今年度は、4-(1)-(2)で述べた通り、「アフター」の文献調査の一環として、北海道教育委員会によるアイヌ民族の民俗文化調査報告書のシリーズの記載から事例を拾っていくことに尽力している。このシリーズはユーカラに関する報告書が現在も毎年数冊刊行されてる。幸いにも札幌市中央図書館(北海道札幌市中央区南22条西13丁目1番1号)と東京都立中央図書館(東京都港区南麻布5-7-13)の蔵書を合わせると、ほぼすべての報告書に目を通すことができる。この報告書を書いている時点では184冊中の151冊に目を通した。調査の方法はいたって簡単である。報告書を頭からめくって、星や天体に関する事例の有無を、ただただ見て行くことである。その際、モチーフや話題の中心となっているかいないか、を記載の有無の判断基準としている。例えば、「星のようにきらめく」の

ように比喻として出てくるような場合は除外してある。残っている 33 冊の報告書のうち、14 冊はウイльтаやオロッコという周辺民族に関する調査報告書である。もちろんアイヌ文化との比較検討のために目は通すつもりであり、アイヌ民族に限って言えば、ユーカラ関連 11 冊、衣服関連 4 冊、舞踊関連 3 冊、文化関連 1 冊となる。終わりは見えてきている。この報告書に関しては調査と並行して、記載の有無、記載されている場合はその内容を一覽にしている所であり、記載内容は別途抜き出してまとめているところである。二年目は、これらの記載を分類するなどに移行していきたい。ここに報告書の記載内容の一例を要約して記載する。なお、ユーカラ関連は年に 3 冊くらい、民俗技術関連が年に 1 冊のペースで令和になっても刊行され続けているので、今後、その分については逐次、追加調査をしてしていく。

◆『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズVI アイヌの暮らしと言葉3』(1993)

語り部は、静内の葛野辰次郎・ツルご夫妻

※今野注：1993 年刊行だが 1984 年の聞き取り音源を活字化したものである。実際には聞き取りのやり取りがあるが、星と天体に関する単語のみを抜粋してある。

- ・カントコロカムイ：太陽と月
- ・チュプカムイ (cup-kamuy) 「恒星の神」 = 太陽・月
- ・クネチュプカムイ (konne-cupkamuy) 「夜の太陽」 = 月
- ・リコマカムイ (rik-oma-kamuy) 「高みにある神」 = 太陽

- ・ピンネアイハシナウコロオйнаマツ (pinne-ay-has-inaw-kor-oyna-mat)
「雄の矢細枝の木幣を持つ尊い女(神)」
= 削りかけをよった木幣をささげる女神 = 太陽
- ・ノチウ (nociw)：星
- ・トイタサオツ (toyta-saot) 「農耕時に退去する」 = スバル・六連星
- ・チコヤウケ (cikoyawke)：宵の明星・金星
- ・ニサツサオツ (nisat-saot) 「明け方に退去する」 = 明けの明星・金星
- ・イユタニ (iyutani) 「杵」 ※オリオン座のベルトの部分にあたる
あるいは イユタ (iuta) 「搗きものをする」 ※オリオン座の一部
- ・ニソロエサンペツ (nisor-e-san-pet) 「空に下ってくる川」 = 天の川

太陽や月に限っても、複数の単語がある事がわかる。同じ単語が太陽と月を示すこともあり、アイヌ民族の人々は、どうやって意味を判じているのだろうか。話の文脈の中で分かるという事なのかもしれない。

報告書の調査と合わせて、神話や伝承の事例も並行して行っており、今は、更科源蔵氏の書籍を中心に中身にあたっている。また、江戸や明治のアイヌ語が記載された和人の手による文献にもあたっており、これらに記載されている事例の抜きだしが次年度以降の作業として待っている。調べた書籍はすべて文献リストに連ねて、記載の有無を明記してある。

No.	文献名
<p><表1> 末岡外美夫氏 参考文献全リスト（『アイヌの星』『人間達（アイヌタリ）の見た星座と伝承』）</p> <p>※二冊に収録の巻末の参考文献と本文から拾い上げて重複をなくし、年代順に並べた。 一部、明らかな誤りは正してある。No.は今野が便宜上つけたもの。 薄い網掛けは、末岡氏の著作物（『アイヌタリ』、北海道新聞連載は含まない）</p>	
1	1615年 「蝦夷島記」 著者不詳
2	1621年 「アンジェリスの第二蝦夷報告」 聖心女子大学カトリック文化研究所訳
3	1670年 「津軽一統志巻十」
4	1688年 「快風丸蝦夷聞書・快風丸記・快風丸涉海記事」
5	1710年 「蝦夷談筆記」 松宮観山
6	1712年 「蝦夷藪話 聊腫庵筆記」
7	1712年 「和漢三才圖繪」 寺島良宏
8	1712年 「蝦夷藪話」 聊腫庵
9	1715年 「正徳五年松前志摩守差出候書付(並ニ追而差出候書付)」 松前矩広
10	1720年 「蝦夷志」 新井白石
11	1739年 「北海隨筆」 坂倉源次郎
12	1756年 「風土遊覧集」 二階堂慎庵
13	1758年 「津軽紀聞」 著者不詳
14	1781年 「松前志」 松前広長
15	1786年 「蝦夷拾遺」 佐藤玄六郎他
16	1788年 「東遊雜記」 古川古松軒
17	1789年 「寛政蝦夷乱取調日記」
18	1790年 「蝦夷草紙」 最上徳内（1960、吉田常吉編）
19	1791年 「蝦夷廻天布利」 菅江真澄
20	1792年 「夷諺俗話」 串原正峯
21	1798年 「蝦夷日記」 武藤勘蔵
22	1799年 「厚岸乱申上」 最上徳内
23	17世紀? 「松前の言」
24	1800年 「蝦夷草紙後篇」 最上徳内
25	1804年 「蝦夷方言藻汐草」 上原熊次郎
26	1808年 「渡島筆記」 最上徳内
27	1822年 「北夷談」 松田伝十郎
28	1845年 「蝦夷日誌」 松浦武四郎
29	1848-1854年（嘉永年間）「松前方言考」 淡斎如水
30	1850年 「三航蝦夷日誌」 松浦武四郎
31	1851年 「再航蝦夷日誌」 松浦武四郎
32	1854年 「蝦夷語箋」 上原熊次郎
33	1855年 「北蝦夷図説」 間宮林蔵
34	1857年 「夕張日誌」 松浦武四郎
35	1859年 「後方羊蹄日誌」 松浦武四郎
36	1860年 「北蝦夷余志・石狩日誌」 松浦武四郎
37	1860年 「石狩日誌」 松浦武四郎
38	1861年 「久擢日誌・十勝日誌」 松浦武四郎
39	1861年 「東蝦夷夜話」 大内余庵
40	1862年 「天塩日誌・夕張日誌」 松浦武四郎
41	1863年 「知床日誌・納沙布日誌」 松浦武四郎
42	1864年 「蝦夷語集録」 松井宗右衛門、能登屋門吉
43	1864年 「西蝦夷日誌」 松浦武四郎
44	1864年 「蝦夷語集録」 能登屋門吉他
45	1865年 「東蝦夷日誌」 松浦武四郎
46	1868年 「番人門吉蝦夷記」 能登屋門吉

47	1884年	「北海道史」 開拓使 ※注 1
48	1884年	「北海道志 第35巻雑記(祥異)」 開拓使
49	1886年	「北海道後志国ニ存スル環状石籬ノ遺跡」 (『東京人類学会報告1・2』) 渡瀬荘三郎
50	1891年	「北海道蝦夷語地名解」 永田方正
51	1892年	「シベリヤ、蒙古及び歐露の異民族間に於ける シャーマン教」 (『シャーマニズムの研究 1940年版』) ウェー・エム・ミハイロフスキー著・高橋勝之訳
52	1896年	「Moderne Volkerkunde」 T.Achelis.
53	1899年	「Star-Names and Their Meaning」 R.H.Allen.
54	1900年	「アイヌ人及其説話」 ジョン・バチェラー ※注 2
55	1903年	「千島アイヌ」 鳥居龍蔵
56	1905年	「袖珍 北海道土人語案内」 佐々木悦蔵編
57	1908年	「アイヌ人の宗教について」 ジョン・バチェラー
58	1916年	「石狩十勝両河紀行」 松本十郎
59	1919年	「北海道史」 北海道庁
60	1920年	「言語に映じたる原人の思想」 金沢庄三郎
61	1922年	「アイヌの話」 佐々木長左衛門
62	1923年	「Fire Festival in Ancient Greece.」 M.P. Nilsson.
63	1923年	「北蝦夷古謡遺篇」 金田一京助
64	1923年	「アイヌ神謡集」 知里幸恵、郷土研究社
65	1923年	「アイヌ人及其説話」 ジョン・バチェラー
66	1923年	「アイヌ聖典」 金田一京助
67	1923年	「The Medicine Man」 J.L.Maddox.
68	1925年	「星座巡禮」 野尻抱影
69	1927年	「十勝アイヌのあしあとのこの後のみち」 喜多章明
70	1928年	「Varieties of Religious Experience.」 J. William.
71	1928年	「Peoples of Asiatic Russia」 W.Jochelson.
72	1929年	「樺太アイヌ叢話」 千徳太郎治
73	1929年	「津軽領内に於ける蝦夷関係の史料と其の研究」 (『東北文化研究5月』) 喜田貞吉
74	1929年	「訂正増補樺太アイヌ語集」 葛田猛千代
75	1930年	「The story of Asiatic」 Russia.J.Chard.
76	1930年	「ユーカラの研究」 金田一京助 ※注 3
77	1931年	「The Story of Oriental Philosophy.」 L.A. Beck.
78	1931年	「若きウタリに」 バチェラー・八重子
79	1931年	「虎杖丸の曲」 (『ユーカラの研究: アイヌ叙事詩』 (東洋文庫論叢 第14 1,2)) 東洋文庫
80	1931年	「Ancient Civilizations of The Andes」 M.P. Ainsworth.
81	1931年	「History of Japanese Religion」 M.Anesaki.
82	1932年	「アイヌ・英和辞典」 ジョン・バチェラー
83	1932年	「蝦夷酒天布利」・「蝦夷喧辞弁」 (『菅江真澄集』) 柳田国男監修
84	1932年	「The Indians of Canada」 J.Diamond
85	1933年	「Urgeschichte und älteste Religion der Aegypter」 S.Kurt.
86	1934年	「The Indians of The North-west Coast」 P.E.Goddard.
87	1934年	「漁村民俗誌」 桜田勝徳
88	1934年	「北海道旧土人保護沿革史」 北海道庁
89	1935年	「The Eskimos.」 Birket-Smith, kaj.
90	1935年	「The History of the Maya.」 J. Eric
91	1936年	「天文随筆 日本の星」 野尻抱影
92	1936年	「アイヌ語法概説」 金田一京助
93	1937年	「Early Man.」 G. G. MacGurdy.
94	1937年	「アイヌ民俗研究資料」 (『アチックミュージアム彙報第十七』) 知里真志保
95	1937年	「新撰北海道史」 北海道庁編
96	1937年	「アイヌ民俗研究資料 第1」 知里真志保
97	1938年	「The Oxford Book of Greek Verse in Translation.」 T. F. Higham.ebs.

98	1938年	「アイヌ・英・和辞典4版」ジョン・パチェラー
99	1938年	「暦法及時法」平山清次
100	1939年	「イオマンテの文化的意義とその形式(1)」(『北方文化研究報告第2輯』) 犬飼哲夫・名取武光
101	1940年	「イオマンテの文化的意義とその形式(2)」(『北方文化研究報告第3輯』) 犬飼哲夫・名取武光
102	1940年	「星と東西民族」野尻抱影
103	1940年	「日本聖公会小史」ヘレン・ボイル著・前川真二郎訳
104	1940年	「アイヌの研究」金田一京助
105	1940年	「黒教或いは蒙古人に於けるシャマン教」バンザロフ著、白鳥庫吉訳
106	1940年	「アイヌの抱瘡神「パコロ・カムイ」に就いて」(『人類学雑誌第5巻第3・4号』) 久保寺逸彦・知里真志保
107	1940年	「星と東西文学」野尻抱影
108	1940年9月	「シベリヤ、蒙古及び欧露の異民族間に於けるシャーマン族」(『東亜論叢』) ミハイロフスキー著、高橋勝之訳
109	1941年	「北方ツングースの社会構成」(『東亜研究叢書刊行会蔵書』) Prof.Srgei Mikhailovich Shirokogorov
110	1941年	「アイヌ風俗絵巻」西川北洋
111	1942年	「アイヌ政策史」高倉新一郎
112	1943年	「樺太アイヌの住居」山本祐弘
113	1943年	「アイヌの神典」金田一京助
114	1943年	「Siberia」L.Emil.
115	1943年	「シベリア諸民族のシャーマン教」ニオラツェ著・牧野弘一郎訳
116	1944年	「樺太アイヌの説話」(『樺太庁博物館彙報第3巻第1号』) 知里真志保
117	1946年	「星の美と神秘」野尻抱影
118	1948年	「Ancient Egyptian Materials and Industries. 3d」A. Lucas.
119	1948年	「神話と文化境域」三品彰英
120	1948年	「アイヌの歌謡」知里真志保
121	1948年	「Le régime social des Mongols V.Boris. ti」by M. Carsow.
122	1949年	「A History of Greek Religion. 2d.」M.P.Nilsson.
123	1949年	「Andean Culture History.」W.C. Bennet. ed.
124	1949年	「How Greek Science Passed to the Arads.」O'Leary De Lacy E.
125	1949年	「La poésie égyptienne 3d」P.Gilbert.
126	1949年	「Siberian Passage」I.P. Tolmachev.
127	1949年	「日本星座方言資料」内田武志
128	1950年	「A Handbook of Greek Mythology Including Its Extension to Rome.」H. J. Rose.
129	1950年	「Religion in Human Experience.」J. R. Everett.
130	1950年	「アイヌ住居に関する若干の考察」(『民族学研究 十四巻4号』) 知里真志保
131	1951年	「The Oldest Stories in the World.」T.H.Gaster.
132	1951年	「アイヌ人と星」(『旭川天文研究会 天文図報3号』) 末岡外美夫
133	1952年	「Reallexikon der ägyptischen Religionsgeschichte.」H. Bonnet.
134	1952年	「呪師とカワウソ」(『北方文化研究報告第7輯』) 知里真志保
135	1952年	「カムイコタンのストーンサークル」(『考古学雑誌385~6』) 河野広道
136	1953年	「ユーカーラの人々とその生活<歴史第2号 3号-1954>」知里真志保
137	1953年	「分類アイヌ語辞典(1)・植物篇」知里真志保
138	1954年	「The Distribution of Human Blood Groups.」A. E. Mourant.
139	1954年	「アイヌの神話」(『北方文化研究報告第9輯』) 知里真志保
140	1954年	「Peoples of The Soviet For East.」K.Walter.
141	1954年	「分類アイヌ語辞典(3)人間篇」知里真志保
142	1954年	「惑星の旧愛乃名」(『THE SKY 7号』) 末岡外美夫
143	1955年	「アイヌ語入門」知里真志保
144	1955年	「アイヌ宗教成立の史的背景」(『日本人類学会・日本民族学協会連合大会第8回紀事』) 知里真志保
145	1955年	「北海道教育史地方編」北海道立教育研究所編
146	1955年	「Indian Village」S.C.Dube.
147	1955年	「北方の神話と星」A・オルト、末岡外美夫、佐藤昭一
148	1956年	「Atlas Coeli 1950.0」A. Becva'r.

149	1956年	「地名アイヌ語小辞典」 知里真志保
150	1957年	「The Interplay of East and West.」 W.Barbara.
151	1957年	「The Story of Indian Music.」 O. Gosvami.
152	1957年	「新星座めぐり」 野尻抱影
153	1957年	「星座 新天文学講座Ⅰ」 野尻抱影
154	1957年	「星と東西民族」 野尻抱影
155	1957年	「北前船考」 越崎宗一
156	1958年	「日食に因むアイヌの伝説」 (『北海タイムス』) 末岡外美夫
157	1959年	「The North Alaskan Eskimo」 R.E.Spencer.
158	1959年	「アイヌ絵志」 越崎宗一
159	1959年	「全天恒星図」 広瀬秀雄・中野繁
160	1959-1968年	「アイヌ叙事詩ユーカラ集(1-8)」 金成マツ筆録・金田一京助訳注
161	1960年	「Ethnographic Bibliography of North America. (Third Edition)」 <Behavior Science Bibliographies > G. P. Murdock.
162	1960年	「アイヌに伝承される歌舞詞曲に関する調査研究」 (『文化財委託研究報告 第2』) 文化財保護委員会 知里真志保
163	1960年	「文化財委託研究報告Ⅱ」 知里真志保
164	1960年	「アイヌ語研究」 金田一京助
165	1961年	「Masterpieces of the Orient.」 G. L. Anderson.ed.
166	1961年	「えぞおぼけ列伝」 知里真志保
167	1961年	「A history of astronomy」 A.Pannekoek.
168	1962年	「Ainu (Greed and Cult).」 N.G. Munro.
169	1962年	「Catalogue of Bright Stars.」 D. Hoffleit. (Yale Univ. Observatory)
170	1962年	「アイヌ民話と星」 (『日本大学第二高等学校研究 集録4』) 末岡外美夫
171	1962年	「分類アイヌ語辞典(2)・動物篇」 知里真志保
172	1963年	「Ethnographic Bibliography of South America.」 T.J. OLeary.
173	1964年	「アイヌの墓」 藤本英夫、日本経済新聞社
174	1964年	「北前船」 牧野隆信
175	1965年	「日高地方におけるアイヌ系住民の生活実態とその問題点」 日高支庁編
176	1966年	「アイヌ研究」 高倉新一郎
177	1966年	「天皇制国家の支配原理」 藤田省三
178	1966年	「北前船の船跡を追って」 (『海事史研究第十一号』) ロバート・G・フラーシェム
179	1967年	「アイヌの神話」 更科源藏
180	1967年	「アイヌ秘史」 桜井清彦
181	1967年	「蒙古史(上下)」 ドーソン著、田中萃一郎訳
182	1968年	「弁財船入来」 (『海事史研究第十号』) 越崎宗一
183	1968年	「北方自然民族民話集成」 山本祐弘
184	1968年	「アイヌ：歴史と民俗」 更科源藏、社会思想社
185	1968年	「アイヌの世界」 泉靖一他
186	1969年	「樺太アイヌ語地名小辞典」 佐々木弘太郎
187	1969年	「アイヌの農耕文化」 林善茂
188	1970年	「アイヌの他界観に就いて」 (『駒沢大学文学部研究紀要28』) 久保寺逸彦
189	1970年	「スズキ星座図譜」 鈴木敬信
190	1970年	「海の宗教 自然と人間シリーズⅡ」 桜田勝徳
191	1970年	「擦文文化とオホーツク文化の関係について」 (『北方文化研究4』) 大井晴男
192	1970年	「日本列島地質構造発達史」 市川浩一郎他
193	1971年	「L'Enigme de la Grande Pyramide.」 A. Pochan. ※注4
194	1971年	「Megalithic Lunar Observatories.」 A. Thom.
195	1971年	「日本のシャーマニズム」 堀一郎
196	1971年	「北千島アイヌ語」 村山七郎
197	1971年	「アイヌラックルの自出」 (『アイヌの昔話』) 久保寺逸彦訳注
198	1971年	「北千島アイヌ語：文献学的研究」 村山7郎、吉川弘文館

199	1971年	「古代立石の天文学」(『天文月報5・6月号』) 下保茂
200	1971年	「朝鮮の神話と伝説」 申来鉦
201	1971年	「日本のシャーマニズム」 堀一郎
202	1972年	「アイヌの信仰」 畑中武夫
203	1972年	「シンポジウム「アイヌ」」 埴原・藤本他、北海道大学図書刊行会
204	1973年	「日本星名辞典」 野尻抱影
205	1973年	「星の方言集 日本の星」 野尻抱影
206	1976年	「星の歳時記」 武田みさ子編
207	1976年	「L'Enigme de la Grande Pyramide. Andre. Pochan.1971」(「太陽と巨石の考古学」) 酒井傳六訳
208	1976年	「アイヌ語は生きている」 ボン・フチ
209	1977年	「昭和51年度アイヌ民俗文化財緊急調査報告書」 北海道文化財保護協会
210	1978年	「ユーカーラはよみがえる」 ボン・フチ
211	1979年	「アイヌの星」 末岡外美夫
212	1981年	「骨から見た日本人の起源」(『季刊人類学』12-1) 山口敏
213	? 年	国学院大學MF資料 知里幸恵II

※注1 : No. 47 が「アイヌの星」に掲載されていたが 1884 年発刊の当該書籍が見当たらない。

「史」は「志」の誤りか？

※注2 : No. 54 と No. 65 は同一書の改訂版か何か？

※注3 : No. 76 は No. 79 の 1931 年発刊と同じ書籍か？ 30 年に出た同書名の本がヒットしない。

No. 76 の年号が誤り？

※注4 : No. 193 の邦訳版が No. 207。同一書だが原語と邦訳なので別書籍扱いにした。

第三章

北海道のろうそくもらい行事を対象とした天文民俗の文化伝搬に関する調査

1. 「ろうそくもらい」

ろうそくもらい、は北海道独自の七夕の風習であると言い切ってよかろう。これまで各地の七夕を見てきているが、道外で同じ行事と出会ったことがないからである。ろうそくもらいは簡単に言うと、函館では7月7日、その他道内地域は8月7日の夜に、子供たちが集団となって近所の家々を回ってろうそくをもらう行事である。近年ではお菓子を配ることが主流となっている。ハロウインのようだ、と驚かれることはあるが、道外出身者に同じ行事があるという声を聞いたことがない。とはいえ、北海道の和人の文化は基本的には何らかのルートで持ち込まれたものであるから、そのルーツは道外のどこかにあるはずである。第一期の調査において、それが東北や新潟付近までの日本海沿岸の「ねぶた」やそれに類する様々な行事であるらしいことは見えてきた。今期も調査を継続し、ろうそくもらいが「どこから北海道にやってきて」、どのようにして「北海道内にひろまったのか」を解く手がかりを求めていきたい。

北海道内に広まった、と書いたが、道内のすべての地域でろうそくもらいが行われているわけではないのが、その伝播ルートを考える際に厄介である。しかも、一つの自治体の中でも、実にまだら模様に行くエリアと行わないエリアが混在しているのである。道南や道北の地域差、といったざっくりとした類のものではないのである。その地域差は、実は家庭内での文化体験の差につながっている。自分は道産子であるが、親が転勤のために道内のいくつかの街で育っている。生まれたのが室蘭市、幼少期を登別市、幼稚園から高校までは旭川市、大学が札幌市である。旭川市の東部の地域では、ろうそくもらいが行われており、自分も参加していた。しかし、道南の豊浦町生まれの父親と、同じく道南の伊達市生まれの母親は、子どもの頃にそのような体験はなかったとのこと。旭川に越してきて、8月7日の夜にいきなり、子どもたちが徒党を組んで「ろうそくだせ、だせよ、ださないとかっちゃんぞ、おまけにくいつくぞ」と物騒な歌を囃しながらやってきて、「何が始まった？」と戸惑ったらしい。では伊達市では行われていないかということ、そうではない。『伊達市史』(1994)によると、「六日の夕方に子供が数人集まって、ろうそくやお菓子などをもらって歩く行事が、市街地を中心に昭和42年頃まで行われていた。歌は「ローソク出せ、出せよ、出さねば、カッチャクゾ、おまけにクイツクゾ」。関内や稀府では見られない」とある。御母親の住んでいたエリアは、上記の行われていない場所ではなかったが、伊達市内でも行われている場所とそうでない場所があり、たまたま母親が育ったエリアでは行われていなかったのである。旭川でも市内全域で行われているわけでもなく、ろうそくもらいとは、実に厄介で、実に面白い代物なのである。

2. 「ろうそくもらい」の实地調査

(1) 札幌市内の町内会での調査

第一期の調査期間は丸々コロナ禍と重なってしまい、子どもが中心の行事であるろうそ

くもらいは、ことごとく中止となった。昨年は復活するようになり、知人宅でもその家の子どもと友人が少数で行うとのことで見学をした。コロナ明けの今年は、より大々的に行事が復活するのではないかという確証があった。そこで、いくつかの自治体に照会のメールを流して、ろうそくもらいの情報を収集した。結果、札幌市役所市民文化局市民自治推進室の市民自治推進課からの情報で、札幌市内のある自治会で行われることがわかった。なお、天文民俗班の古屋氏も同行をした。

- ・日時：8月7日の15時～16時くらいまで
- ・訪問先：南円山地区まちづくりセンター
- ・主催：札幌市中央区南円山地区

同地区は、「明治3年に山形県から30戸90人が入植したのが始まりです（翌4年円山村、同39年山鼻村と合併、藻岩村となりました）。焼き物の入手が難しかった明治から大正にかけて、界川では中井陶器工場が陶器を生産。また、大正13年には定山溪から温泉を引いた札幌温泉がにぎわいました。昭和16年には札幌市と合併、同23年には円山地区が北と南に分かれ、南円山地区ができました」と札幌市中央区のHPで紹介されている。

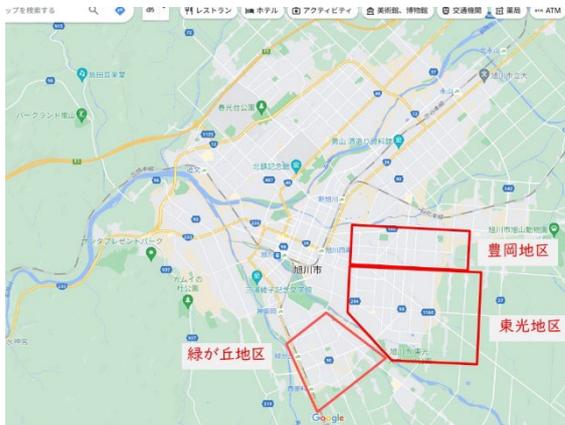
<https://www.city.sapporo.jp/chuo/minamimaruyama/news.html>

では、ろうそくもらいは入植元の山形県から伝わったのかということと実は違った。当日は北海道開拓の村から移動し、まずは地域の公民館であるまちづくりセンターにお邪魔した。センター長にはすでに電話でコンタクトを取っており、市役所からも連絡をもらっていたとのことであった。三々五々とセンター前に親子連れがやってきた。お子さんは7、8人くらいで、親御さんが7人ほど付き添いでやってこられた。自分が行っていた昭和50年代では、日が暮れた夜道を子どもだけで行っていたのだから、時代の流れによる行事のあり様の変容を目の当たりにした。古屋氏と共に参加者にあいさつをして、ろうそくもらい、は始まった。手に手に、参加者のご高齢の方が造られた紙の提燈を持って進んでいく。最初の家の前に着くと、参加者のひとりが家のチャイムを鳴らし、家主が姿を見せたところで囃し歌を歌う。歌は「ろうそくだせだせよ、ださないとかっちゃんぞ、おまけに食いつくぞ」の「かっちゃんぞ系」（函館以外で多く歌われている歌詞）であった。家主は小分けにされたお菓子の入った袋を子どもたちに渡し、子どもは大きな声でお礼を言って、次の家へと歩きだした。そうやって10件ほどの家を廻り、最後はマンションを訪問して現地解散となった。主催する方にお聞きしたところ、

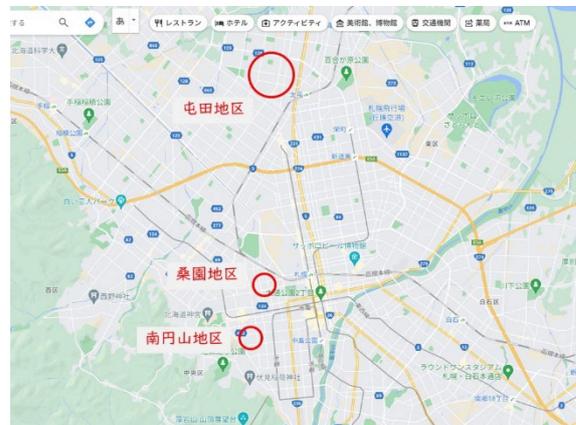
- ・地域の子ども会が主催。
 - ・訪問する家は子ども会で事前に決めて連絡をしており、7、8軒を訪問。
 - ・同地区では昔おこなわれていたが近年はやっておらず、新たに子ども会担当になった方が復活させた。その方は旭川市出身で、参加者の親御さんには旭川市出身者が多く、歌や流儀はそれに倣った。
- 昔から地域にいるお父さんにしてみると歌詞とイントネーションが違う。とのこと。

入植元の山形県は無関係で、実は、自分が慣れ親しんだ旭川流のスタイルのろうそくも

らいであることが、聞き取りで判明した。旭川出身の方々は4人ほどいたが、2人は筆者が暮らしていた東光エリア、もう一人は豊岡エリア、そしてもう一人は緑が丘エリアから札幌に来られたとのことで、まさに自分と同じカルチャーの持ち主が札幌で行事を行っていたのであった。すでに入植当時の伝統が残っているのではなく、道内での人の移動によって伝播している様子がわかる一例となった。実は旭川市内でも、古くから入植のあった永山エリアの人間はろうそくもらいを周りでは行っていないと言っていた。東光・豊岡・緑が丘はいずれも市内東部の新興住宅地である。札幌市内でいくつかコンタクトをしていたエリアでは、この南円山エリア以外にも屯田エリア、桑園エリアではろうそくもらいを行っていることがわかっている。ただ、桑園エリアは残念なことに、コロナ禍での中断と訪問先として受け入れてくれる人が減ったとの理由で、2023年から町内会連合でのろうそくもらいはなくなって、町内会個別に七夕飾りをするようになったとの回答を得た。コロナ禍がさらに伝統行事のあり様を変えてしまっている可能性は大いにある。



旭川市内のろうそくもらい関連地



札幌市内のろうそくもらい関連地

※参加者が子どもであることや肖像権等の兼ね合いから、写真は掲載を控えている。

(2) 北海道開拓の村（北海道札幌市厚別区厚別町小野幌 50-1）での調査

北海道開拓の村は、明治から昭和初期にかけて建築された北海道各地のおよそ 50 棟の建造物を移築復元・再現した野外博物館である。市街地、漁村、農村、山村の 4 エリアに分かれて、移築元の生活の様子等がしのばれるように構成されている。ここで七夕の頃に、以下のイベントが催されているとのことで、市内でのろうそくもらいに向かう前に古屋氏と赴いた。行われていたイベントは下記の通り

- ・岩間家年中行事「岩間家の七夕」：亙理からの移住者の年中行事として七夕時期に行っていた季節展示を紹介。
- ・季節展示「七夕飾り」：村内の建造物前や庭に柳の木に飾り付けした七夕飾りを展示
- ・年中行事展示「北海道の七夕」：「七夕」の北海道の風習、歴史などを紹介
- ・年中行事「北海道の七夕 短冊飾り」



七夕は五節句の一つで「たなばた」として知られています。北海道では地域によって実施日が異なり、七月七日と八月七日のいずれかに行われます。

七夕の夜は、一年に一度だけ「織女星(おりひめ)」と「牽牛星(ひこぼし)」が天の川をはさんで出会う日といわれ、裁縫や書道の上達を願って短冊を書き七夕飾りを行います。地域によっていろいろな七夕行事が見られ、お盆行事と関連したものも少なくありません。

【ロウソクもらい】

七夕に行われる市街地を中心とした風習に「ロウソクもらい」という行事があります。子どもたちが夕暮れ時に数名集まって提灯や電灯を手に家々の玄関先で囃子歌を歌って、ロウソクをもらいます。地域の人たちも子どもたちが回ってくることを見越して、ロウソクを用意したものです。

今日も継承されている地域では、子どもたちに渡るものが、ロウソクからお菓子に変わっているようです。

【 迎え盆 】

先祖の霊を迎えもてなす仏教・神道の行事であるお盆の前には、穢れを払い清める行事があったと考えられています。一例としては水浴びや七夕流しなどが行われてきたほか、迎え盆として提灯・灯笼に火を灯したり、門前で焚火をしたりという習俗が見られました。

中には、田畑の害虫除けが目的の「虫送り」という習俗が混合し、飾り終わった七夕飾りを播種前の大根畑に挿すという家もあったようです。

北海道開拓の村の HP より

<https://www.kaitaku.or.jp/event/%e5%b9%b4%e4%b8%ad%e8%a1%8c%e4%ba%8b%e5%b1%95%e7%a4%ba%e3%80%8c%e4%b8%83%e5%a4%95%e3%80%8d/>

古屋氏が当日に飛行機で千歳に到着であったので、早くに到着した自分はず、開拓の村の中の七夕飾りを巡った。

①旧富士家住宅



家主であった富士成豊は函館に生まれ、函館地方の沿岸測量を行い、千島列島を調査、測量して「クリル諸島海線見取図」を作成した。北海道の測量、気象観測事業の上で指導的役割を果たした人物である。明治7（1874）年の金星日面通過を函館で観測しており、日本近代天文史のうえでも欠くことのできない人物である。家の中には測量機器なども展示されている。元は札幌市内中央区にあった。

②旧松橋家住宅



松橋家は明治初期に秋田県から札幌に移住し、農業及び土地会社経営に従事した。明治・大正・昭和にわたり暮らしが営まれてきた。大正7年（1918年）当時の状況に復元されている。元は札幌市中央区にあった。

③旧有島家住宅



日本近代文学史上の代表的作家の1人である有島武郎〔明治11年（1878）～大正12年（1923）〕が明治43年（1910）5月から翌年7月頃まで住んだ建物。一般の住宅にも、上げ下げ窓などの洋風意匠を取り入れ始めた頃の建物である。元は札幌市白石区にあった。

④旧北海中学校



明治 41 年（1908）から翌年にわたって建築された本館部分で、前身は私立北海英語学校。外観の意匠は、明治半ばから大正期の官庁や学校の木造建築によく見られる様式。元は札幌市豊平区にあった。

⑤旧岩間家農家住宅（建造物の写真は、開拓の村の HP から引用）



旧仙台藩亶理領（宮城県亶理町）の士族移民団として、明治 4 年（1871）2 月に入植した畑作農家。明治 15 年（1882）に郷里の大工によって建築され、間取りなどに亶理の建築様式が受けつがれている。元は伊達市内にあった。

ここで解説ボランティアをされている 60 代の方にお会いした。岩見沢出身であり、子どもの頃にろうそくもらいを行っており、「かっちやくぞ系」の歌詞であったとのこと。北海道では、七夕飾りは笹が大きくならないために柳の木を代用して行うことが多い。これまでの①から④は道内関係という事で、柳の木に飾りつけがなされていたが、この岩間家は仙台から入植したという歴史的な背景があり、本州で広く行われているように、笹に飾り付けをして文化的な差を展示しているとのことであった。当日村内で七夕イベントをしている学芸員 N さんに引き合わせていただくことになった。

⑥旧武井商店酒造部



石炭荷役、回船業を営んでいた武井家が、明治 19 年（1886）頃に建てたもの。元は泊村にあった。こちらで学芸員の N さんにお会いした。市内でのろうそくもらい実施地は存じ上げないとのこと。開拓の村のろうそくもらいのイベントでは、建築物の元の所在地によって、小樽系の歌詞、札幌系の歌詞で歌ってもらい、道内での文化の差を子どもたちに体験してもらったとのこと。

(3) 図書館での文献調査

1月、4月、8月に札幌市中央図書館（北海道札幌市中央区南22条西13丁目1番1号）、1月に市立小樽図書館（北海道小樽市花園5丁目1番1号）で、ろうそくもらいに関する文献類を探した。特、小樽では、第一期の調査において、新潟県から類似する行事が入植者によってもたらされたことがわかっている高島地区に関して、文献探しを行いいくつか成果があった。その他は、道内の市町村史誌についての記述の発掘である。以下、小樽市高島関連の文献の概要を記す。

◆「高島町史」編集・発行 高島尋常高等小学校、1941年

7月7日に七夕をやっていたが後に8月7日になったこと。

町内を子どもたちが燈籠をかざして「ローソク出せ出せや」と盛況だったとの記述。

◆「新高島町史 改訂増補版」第一次編集 高島小学校百周年記念協賛会・増補再編集 大黒昭、2006年

藤塚浜からの「高島越後盆踊り」や東北地方からの「高島七夕祭り」などを紹介。七夕はねぶたのような”やま”を押して町内を練り歩き、家々を回って、ろうそくをもらっていた。小樽市内にも出向いたが、ろうそくもらいが馴染まず、市内に出ることは禁じられた。やがて、”やま”の出来栄を競いパレードをするようになるが、少子化で平成10年に途絶えた。100年の伝統を復活させる声上がり平成16年に「七夕パレード」が復活。

※今野注：令和4年のSTVの特集では、今はやっていないとのこと。

◆「北海道沿岸方言の共通語化（2）小樽における日常生活語（方言）の動態－日本海側・小樽市における方言使用の現況と談話に見る方言－」見野久幸、2006年

越後の風習が多く、七夕もそうであるとの証言の記載。

藤塚浜では、行燈はやらないが、藁で作った船を押して歩く七夕をやる。

◆「小樽市高島の日常生活と伝承文化－1994年度北海道小樽潮陵高校衣食研究同好会活動報告」小樽潮陵高校衣食研究同好会、1995年

高島の信仰と年中行事の項に、「8月やれやま」、についての記載がある。

「七夕の山車・行灯の山車をいう。木や長い竹を細く割ったもので骨組みを作り、紙を貼りつけて彩色し、中に灯をつけ、子供たちが担いで（後にリアカーにつけ）街を練り歩く。「やーれ、やーれ」と囃すので、「やれやま」という。太鼓叩きが担ぎ台の中において太鼓を叩く。「今年（ことし）豊年 ローソクだーせだーせーよ だーさーねーば かっちゃんぐど おーまーけーにくつつぐど」と囃す。昔は、小倉の袴のももだちを取り、白い鉢巻を絞め、日の丸帽子を持って「べんせいーしゅくしゅくー」

と剣舞を、主だった家の庭先でやって御祝儀をもらって歩いたりもした。8月6・7日は山で、8日は海で山車を洗い流した」

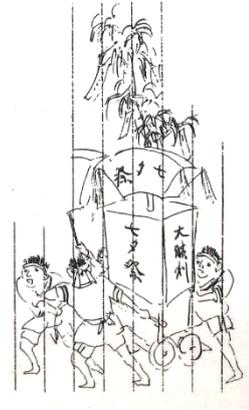
◆「稲垣益穂日記 十巻〈明治37年8月16日～38年4月11日〉 小樽市博物館シリーズ No.13」編集・発行 小樽市博物館、1988年

これは、高知県南国市生まれで、高知で教員となり、明治36年に小樽で小樽区稲穂尋常小学校（現在の小樽市立稲穂小学校）の校長を務めた、稲垣益穂（1858～1935）による全55巻の日記が博物館から刊行されているものである。ほぼ毎日（樺太出張中をのぞく）、高知勤務時代の明治29年から一日も欠かすこともなく記された日記であり、小樽の歴史の貴重な資料である。その明治37年8月16日に今日が旧暦の七夕である、として、以下のような記載がある。

「異形の行燈をとぼして市中をあるき廻り、各戸に入りて
「今年や豊年七夕祭り云々」と節白くひながら舞ひこむと、
家によりては門前払いもするが家によると蠟燭などを与へる。
これは此の異形な行燈に用ひよという意味であらう。

（中略：仙台の七夕と比較をしてから）

当地の風は青森式で成り立ちが違ふ様にも思はるる。」



とあり、イラスト（ページ右に同日記から引用）が描かれている。稲垣益穂の目に、当時の小樽市内の七夕行事は青森のねぶたに近いものであると映っていたことがわかる。確かに、額燈籠のようなものに車がついたものを引いており、現在の絢爛豪華な形態になる前のねぶたとよく似ている。

（4）新潟県村松浜の七夕舟

第一期の調査において、高島の人々の入植元である藤塚浜に隣接する旧中条町村松浜では、七夕舟という行事がある事はわかっていた。8月7日の夜に、「舟の前で子供たちが「竹に短冊七夕さまよ、ローソクだせだせよ、ださねばかっやくぞ」と掛け声をかけて押し合いが始まる」（松本市立博物館編『七夕と人形』郷土出版社、2005年）という行事が紹介されていた。これは歌詞もよく似ており、しかも隣の町内である。新潟県民俗学会の方に照会してみたところ、かつての形式での浜で行う行事は絶えてしまったが、合併後の胎内市立築地小学校で学校の行事として行われており、過去のタナバタ舟などが展示されているので尋ねてみると良いだろう、との回答を得た。そこで、昨年夏の七夕シーズン前にメールにて照会を試みたところ、校長先生の〇先生より返信があった。

「さて、ご依頼の件につきまして回答いたします。

残念ながら、現在本校では、こうした行事は行っておりません。ただ、玄関ロビーに

かつて地域の行事で使用された七夕船が展示されています。おそらく、民族学会の方もこのことが記憶にあられたのではないかと推察しています。また、地域においても現在は行われていないそうです。なお、昨年度、札幌テレビさんが道産子ワイドという番組で、地域の方を取材され、本校の七夕船を撮影していかれました。この番組の様子がYouTubeで確認できます」

とのことで、残念ながら地域の行事としても、それを継承した小学校の行事としても行われていないようである。STVの番組を昨年見ていたが、現地の方も「今は行っておらず、昔やっていた記憶がある」とのことであった。確かにどこかの学校の七夕舟が出ていたが、それが今回の照会でこの築地小学校であることが分かった。現地を訪ねても行事に出逢うことはできないが、せっかくながった縁でもあるので、どこかでこのO校長先生を訪ねて、七夕舟を見せて頂こうと考えている。

3. 伝播及びルーツ検証の調査

(1) 祇園祭

1) ちまき売りの囃し歌を求めて

7月15日―17日に4年ぶりに完全な形式で行われた祇園祭（京都府京都市中心部）に調査に出かけた。その昔、ちょうど祇園祭を訪ねた折、子どもたちが歌っている囃し歌が非常に気になっていた。それは宵宮において、“ちまき売り”の際に歌う歌であった。場所と日によって前半の歌詞は異なるが、後半は「ろうそく一丁献じられましようろうそく一本どうですか」というものであり、初めて聞いたときに、ろうそくもらいの歌詞と重なって聞こえてしまった。日本海側のねぶた行事は、古くは祇園祭に影響を受けているものであるとの指摘もあり、もしかすると祇園祭の歌が北前船に乗って、東北、そして北海道へ流れてきたのではないだろうか、という思いを持ち続けていた。

第一期に祇園祭を訪ねる機会を探ってはいたが、コロナ禍となり、祭りそのものが中止となってしまった。2022年には部分的に復活した。しかし、子どもたちが主役のちまき売りは行われぬ可能性が多く、事実、古屋氏に探りを入れてもらったが、可能性がほぼないという事であった。そこで、2023年、完全復活となったことで、訪問を試みたのである。初日の宵山、いくつか回ってみるも、録音が流れているだけで、子どもたちが歌っている風景にはなかなか出会えなかった。そんな中で、唯一、子どもたちが歌っているのに出会えたのが占出山であった。

2) 占出山の囃し歌

占出山は、32ある山鉾の一つで、ご神体が神功皇后である。安産の神様である事から、宵山には安産の御守りと腹帯とが授与される。錦小路通りから路地を行くと、神功皇后安産御腹帯授納所があり、ここで、お守りやちまきを売る子どもたちと遭遇した。しかも、目の前で子供たちが懐かしいフレーズを歌い始めた。しかし、昨今は子どもたちにカメラを向けることがなかなか難しいご時世である、歌っている様子を撮影録音しようとしたのだが、子どもたちが再び歌いだす事はなかった。

翌日、神功皇后安産御腹帯授納所のスピーカーから録音された歌が流れており、歌詞を聞き取ることができた。

「安産のお守りは これより出ます ご信心のおん方様は
受けてお帰りなされましよう ろうそく一丁献じられましよう」

というものである。山鉾ごとの歌詞の比較等を行えると面白いという事に、古屋氏と話が至ったが、実際に子どもたちが歌っている場面に遭遇するのが難しいようであり、今回は、なんと中途半端な形で終わらざるを得なかった。



占出山の山鉾



神功皇后安産御腹帯授納所の入り口

(2) 富山県高岡市の北前船寄港地関連史跡

「荒木のねつおくり祭り」を訪ねる前後に、ろうそくもらい伝播の手がかりが得られないかと富山県高岡市内の北前船関連地を訪れた。

1) 吉久重要伝統的建造物群保存地区(富山県高岡市吉久2丁目・3丁目)

吉久地区は、加賀藩の年貢米を収納する『御蔵』があった。県南部の平野で収穫された米を、北前船で大坂や江戸へ運送するための拠点として栄えた。現在の街並みが整備されたのは、明治以降。有力町民の手による。令和2年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された。



吉久の街並み



2) 勝興寺（富山県高岡市伏木古国府 17 番 1 号）

浄土真宗本願寺派の寺院で、本願寺を支える連枝寺院のひとつ。2022 年に、本堂と大広間及び式台が国宝に指定された。北前船関連では、入り口の唐門（重要文化財）が 1769 年に京都で建立され、1893 年に北前船 2 艘で移築されたと伝わっている。

◆天から降った石

今回の調査テーマには関係してはいないが、勝興寺には七不思議なるものが伝わっている。その一つが、「天から降った石」である。どう見ても隕石ではなく、各地に伝わる天から落ちてきた石の類のようである。寺に照会したところ下記のような回答が来た。

「以前は、勝興寺近くの国分の浜にあったのですが、夜になるとその石からすすり泣く声があるので、近所の人が哀れに思って勝興寺に運んで、住職にお経を唱えてもらったところ、その夜から泣き声がピタリと止んだ、といういわれがあります。石の産地については確認できていませんが、叩くと金属音がする石の産地があると聞いたことがあります」

ちなみに、各地の落石の例としては以下のようなものがある。

- ・降石（福島県福島市松川）：天保 12（1841）年の「信達一統志」には、「天明根村に天明石と呼ばれる 2 つの石がある。星から落ちてきた」との記述がある。昭和初期の郷土史には安永年間（1772～1781 年）に「夜、空から光る石が落ちてきて、毎夜光を放った」などと記されているという。
- ・交野市の降星伝承の三か所（八丁三所）：私市の獅子窟寺で弘法大師が修行していた折、天から北斗七星が、星田妙見宮（星田 9 丁目）、星の森之宮（星田 7 丁目）、光林寺（星田 1 丁目）の 3 か所に降ってきたという。
- ・岡山県井原市美星町：明神社（黒忠 3430）、高星神社（黒忠 2978）、星尾神社（星田 5276）に、鎌倉の頃、流れ星が三つに分かれて落ちたという。落下地の近くにこの三社が建立されたという。
- ・山口県下松市北斗町「かなえの松」：推古天皇の頃（西暦 595 年頃）、大星（北辰星ともいわれている）が降り、七日七夜光輝き「百済の皇子がこの地へやって来る」とお告げがあった。



重要文化財の唐門



本堂前で異彩を放っている

3) 伏木気象資料館 (富山県高岡市伏木古国府 12 番 5 号)

伏木の廻船問屋の藤井能三が、伏木港を航行する船舶の安全のため私費を投じて 1883 年に設立した全国初の私立測候所。1909 年現在地に移転。いまでも気象観測データを提供し続けている。

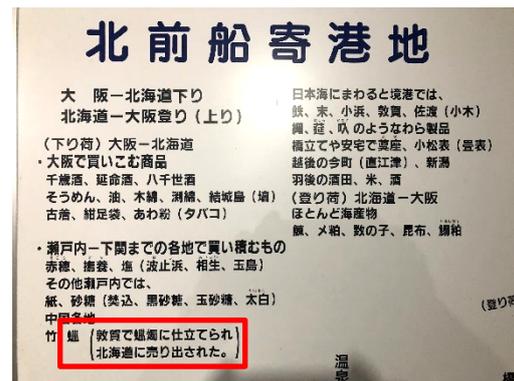


有形登録文化財に指定されている

4) 伏木北前船資料館 (富山県高岡市伏木古国府 7 番 49 号)

文化年間 (1804~1818) 以前より栄えた旧秋元家の邸宅。当初は船頭や水主などの宿泊施設を営み、時代が下るにつれて船を持つ廻船問屋として栄えた。写真右の望楼は港への船の出入りを見張るためのもの。

展示がかなり充実しており、その解説パネルに、北行きの子の主な品物の中に蠟があげられていた。敦賀で蠟燭に加工されて北海道に運ばれた、とある。これは、蠟は敦賀以南では蠟燭の形状をしていなかったとも読み取れる。ろうそくもらい、のローソクが敦賀から先で流通していたとなると、その風習も敦賀以北で行われていたのではないかと考えられる。日本におけるローソク普及の歴史とも絡めて調べていくと、何か手掛かりがつかめるかもしれない。



高台に立ち見晴らしが利く資料館

瀬戸内で積んだ蠟が敦賀で蠟燭になる

5) 伏木神社 (富山県高岡市伏木東一宮 17 番 2 号)

神社の HP によると、「奈良時代・聖武天皇の御代、天平 4 年 (732 年) 9 月に海岸に奇蹟があったので、神明宮として伊勢神宮から布師浦 (ふしうら) の葺ヶ浜 (ぞうがはま) (今の石油基地の沖合い辺り) に勧請され、海岸鎮護・住民の守護神として創祀さ

れました」とのこと。曳山をぶつけ合う勇壮なけんか山祭りが有名。北前船の船主や船頭が、海上安全を祈って鳥居や燈籠、玉垣などを奉納してきた。入り口の石灯籠には、奉納をした当地の北前船の船主の名前が刻まれている。北前船資料館の展示には、下記の写真のように刻印の内容が詳しく解説されている。いずれも文政 2（1819）年に奉納されたものであることがわかる。



伏木神社正面の石灯籠



資料館の解説パネルを引用

6) 山町筋重要伝統的建造物群保存地区／菅野家住宅（富山県高岡市木舟町など）

明治初頭に 5 代の菅野伝右衛門が北前船で財を成し、6 代目、7 代目は高岡銀行、高岡電灯を創立した。主屋と土蔵は国の重要文化財に指定されている。



近代の高岡市の経済発展に寄与した菅野家

今回、高岡市内の北前船関連地を訪ねたが、伏木の資料館で、蠟が敦賀で蠟燭に加工されて北前船で北上したという事実が、一番の収穫であった。もしかすると、ろうそくもらいの南限が、蠟燭の加工地より以北である可能性も出てくるからだ。日本における、灯りの発展史にも今後は着目して、日本海側における蠟燭の移動ルートや、庶民に普及した時期なども調べていく必要があるだろう。

第四章 各地の七夕民俗調査

第一期にあつては、ろうそくもらいの傍証や比較検証のために、各地の七夕行事も訪ね歩いてデータベース的なものを作成した。秋田県のねぶた行事には、昭和 30 年代くらいまでは、ろうそくもらいに似た歌詞が伴っていたことがわかった。山形県でも、子どもが提灯を持って行列をする七夕行事があった。ろうそくもらいとつながりがあるかもしれない行事は各地にあり、それらは行って見て初めてわかることも多いので、極力、行事が行われる現地には足を運んでみたい。そして第二期においては七夕そのものの行事に加えて、似たような意味合いや習俗を伴う民俗調査にも調査対象を広げていく。

(1) 千葉県立房総のむら (千葉県印旛郡栄町龍角寺 1028)

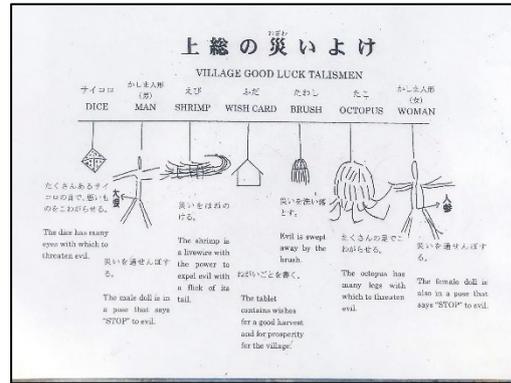
参加体験型の博物館として、原始・古代から近・現代までの衣・食・住・技の移り変わりや房総の伝統的な生活様式を学びながら体験できる。商家の街並みや農村の暮らしが当時の建築物と共に再現されている。

当初は、千葉県で七夕行事として多く見られる七夕馬の調査に赴いたが、そちらは芳しくなかった。しかし、農村エリアの各所、多くは集落の入り口や辻などに綱が渡されているのに遭遇した。それは、岐阜県高山市、熊本県八代市、同芦北町に見られる七夕綱を思い起こさせるものであった。八代と芦北に関しては「熊本県の八代市と芦北町に伝承される七夕行事で、集落の入口などに綱を張り、藁製の人形や履物、農具などの藁細工を吊るすものである。綱は、長い一本綱で、集落を流れる川を挟んで張られる場合が多く、七夕様(牽牛・織女)が綱を伝わって会う、綱を張ることで集落内に悪霊や疫病などが侵入するのを防ぐ、盆の精霊(先祖の霊)が綱を渡ってやって来るなどの伝承がある。また、綱の切れ具合によって、農作物の出来を占うことも行われてきた」(文化庁の「文化遺産オンライン」<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/233118> より)とあり、「道切」や「辻切り」「綱つり」などと呼ばれる習俗に類似するものであった。再現展示されていたのは、まさに「辻切り」や「綱つり」であった。七夕綱には、織姫と彦星の星祭りの性格に、道切の性格も付加されているように見受けられ、各地の道切や、あるいは穢れを流したり追い払ったりする人形の事例なども幅広く調べて行こうと考えている。

展示されている綱つりはいくつか形態があったが、その一つの飾りにはそれぞれ、サイコロは“たくさんある目で悪い者を怖がらせる”、男女一対のかしま人形は“悪いものを通せんぼする”、えびは“災いをはねのける”、札は“願い事を書く”、たわしは“災いを洗い落とす”、たこは“たくさん足の怖がらせる”という意味合いがあるという。村に災いを入れずに災いを払う、ということは七夕の意味合いでも重視される場所である。展示のキャプションを拾うと、房総の「綱つり」や「辻切り」は、印西市龍腹寺(旧印旛郡本埜村)で1月8日、木更津市金田中島で1月12日、佐倉市井野で1月25日、南房総市和田町(旧安房郡和田町)や八千代市上高野で1月28日、富津市関尻で2月の初めての雨の日、と多くが1月から2月に行われるようである。中には鴨川市打墨の様に特に決まっていない、という集落もある。時期的に見て、七夕と対になる正月の同じ意味合いを持った行事、とみることができる気もするが、その辺りは確かめて行こうと思う。



木更津市金田中島の綱つりの再現



飾りは悪いものを追い払う役割がある

(2) 由比北田の天王船流し報告会 (由比生涯学習交流館 多目的ホール・静岡県静岡市清水区由比北田 457-1)

「由比北田の天王船流し」は、清水区由比北田の北野天神宮の境内にある津島神社で行われる疫病除けの民俗行事。全長 4 メートルほどの「天王船」という麦藁舟に災いを託して海へ流す天王信仰系の行事である。厄を船とともに流す意味合いや、富山の虫送り系七夕で流す船に似ている事、ろうそくもらいのルーツではないかと考えている祇園祭も天王祭である事、牛頭天皇が牽牛との関係で語られる七夕伝承がある事などから興味を持った。7月の第三土曜日に行われており 2022 年に訪問を試みた。しかし、当日は低気圧横断による天候の悪化と行事の実施や交通機関への影響が見込まれたことから断念した経緯がある。文化庁より記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財(選択無形民俗文化財)に選択されており、2021、22年に調査が行われ、23年にその報告書の刊行を記念して報告会が開かれることになった。そこで、地元の図書館での報告書複写もかねて、5月27日の報告会に参加した。七夕との関連性に着目して、報告会のレジュメから抜粋をさせていただく。

◆由比北田の天王船流しの特徴と各地域に伝わる民俗行事

(東京文化財研究所 無形文遺産部 無形民俗文化財研究室長 久保田裕道氏)

1. 舟を流すー静岡県内の「川流し」「フネ流し」

- ・天竜川水系の中流ではカヤの舟、下流ではワラの舟や輿を燃やして流す。
- ・大井川水系はワラで円形の“タル”を作り松明を灯して流す。
- ・富士川水系は盆行事。精霊船の系譜。形態は大井川の類似点が多い。
- ・狩野川水系も盆行事。ワラで作る舟形が多い。

2. 植物で作る仮屋・舟

- ・天王信仰の中心地である津島神社の「御葎神事」。神域で採れたヨシで穢れを移して川(今は池)に流す。
- ・尾張西部では子供たちがヨシ、ワラ、野菜などで天皇様の祠や蛇を作る。仮屋作りが天王信仰の重要な要素。静岡、愛知、岐阜、三重、滋賀県一帯。
- ・天王祭は半夏生とともに麦作儀礼を関連付ける必要も。

3. 松明・灯明

- ・津島天王祭では宵祭りに500個の提燈をつけた巻藁舟を浮かべる。
ヨシが流れ着いた場所に灯明台をつくり、75日間献灯する。
- ・天竜川水系の「池田やかた祭り」（磐田市）は、ヤカタに願いを書いた提燈を取り付け、最後は燃やして流す。
- ・安部川水系の「久能尾のナガシダイ」（静岡市）がロウソクを灯して流す。
- ・大井川水系は送り火の慣習と混ざり、「平谷の流したい」（川根本町）などの天王祭行事と富士川水系の「川カンジー」（富士宮市）といった盆行事は同じものを流す。

4. 川・海に流す

- ・8/16に「麦わら舟流し」（河津町）、「三戸のオショロ流し」（三浦市）。
- ・天王祭行事と盆行事の舟は流す事で厄災を防ぐ。東アジアに広がる。
台湾の「迎王祭」は「王船」を燃やしながらか海に流す。「王」は様々な厄神。
韓国でも死霊救済のために「竜王祭」でワラの船を海に流す。

◆水系における船流し行事（元静岡市文化財保護審議会委員 富山昭氏）

- ①五大河（天竜・大井・安部・富士・狩野）いずれの流域にも類似行事が見られ、静岡県での天王信仰の浸透ぶりを確認できた。
- ②「フネ流し」の系統の民俗は、「フネ」の形態等に地域差はあるものの、いずれも災厄を流し去ろうとする天王信仰ののっとるものとして把握される。
- ③北田と最も類似する船流しと考えられるのは、静岡市駿河区広野の事例だが、津島信仰の関わりについては北田のような明確な伝承がない。

報告会に参加して浮かんだ疑問を後日、報告会の主催をされた静岡市観光交流化局文化財課宛てにメールにて照会を試みた。

1. 各地の七夕行事との関連性につきまして

天王船の行事が主に四つの要素を持っている、とあり、主に東海地方の類似行事が紹介されておりました。舟を流す、植物で作る、松明や灯明、川・海に流す、という要素が、各地の七夕船やニブ（ねぶた）流しにも共通していると思われました。これらの行事も同様に穢れや、場合によっては病虫害、眠気を流しますが、天王船流しと関連性はあるのでしょうか。日本海側の行燈行事やねぶたは祇園祭が北前船で伝播した要素も持っている、と聞いたことがあります。そういった流れで説明が可能なものなのでしょうか？

2. 牛頭天皇と牽牛の関係につきまして

各地で織姫と牽牛の対になる組み合わせの神社が見受けられます。そのいくつかは、牽牛の代わりに牛頭天皇をまつる場合があります。古来からある祓いなどの意味合いと習合した七夕が、さらに祇園や津島信仰等が習合して祭神が上書きされている、と考えることはできますか？ 単に、牛のイメージからの連想で、という単純な理由なのかも

しませんが、何か理由というものが通説や学説としてありますでしょうか？

これに対して、静岡市観光交流化局文化財課文化財保護係の方から回答を頂いた。

1. 各地の七夕行事との関連性につきまして

例えば、尾山の七夕流しは心身の穢れや災厄を祓う行事として伝えられており、七夕流しを区切りに、盆の行事の準備に入ります。対して、由比北田の天王船流しは愛知県津島市の津島神社への信仰が行事の根底にあり、夏の初めに疫病除けを願って行われる点が天王船とニブ（ねぶた）流しとの違いかと考えます。ただ、ご指摘の通り、穢れや災厄を祓う、舟を流す等の特徴は類似点が多くあり、天王船との関連性がないと判断することはできないとも考えます。本調査では、津島信仰・天王信仰・祇園信仰の行事を中心に類似行事を調査しましたが、精霊流しや水難者供養のために行われている行事でも、船の形状や素材から類似しているものは一部調査報告書にて掲載いたしました。今回掲載した行事は全国的に存在する船流し行事の一部ですので、ニブ（ねぶた）流し、七夕流しとの関連性の検討も課題としたいと思います。

2. 牛頭天王と牽牛の関係について

2つ目の牛頭天王と牽牛の関係ですが、申し訳ございませんが、その観点での調査は今回行わなかったため、本課ではわかりかねます。もし、回答までにお時間をいただけるようでしたら、東京文化財研究所無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長の久保田裕道先生にお会いした際にお考えを確認いたします。

七夕行事と天王船流しとの関連性をすぐに断じることはできないとのことである。夏の暑気払いや穢れ払い、眠気払いの時期に行われる意味合いが、七夕以外の習俗との結びつきがあってもおかしくはない。その結果、お盆の側面を持つ七夕と同じ性格の行事があってもおかしくはないであろう。これまでは、ろうそくもらいの伝播にとらわれて、主に日本海側の七夕行事を訪ねていたが、今後は太平洋側、特に天王祭り系の行事に焦点を当ててみようと考えている。肝心の、由比北田の天王船流し自体も未見であるので、2024年に是非とも訪問したい。

「由比北田の天王船流し」は、平成26年に文化庁から記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されました。これを受け、静岡市では令和3・4年度の2か年で天王船流しの特徴や歴史などの調査を行い、調査報告書を作成しました。このたび、その完成を記念し、調査委員を講師に迎えて、報告会を開催します！

◆開催日時・場所
令和5年5月27日(土)
13時30分から15時30分
(13時00分開場)
由比生涯学習交流館 多目的ホール
(清水区由比北田457番地の1)

◆定員 先着100人(無料・申込不要)

◆講師 ◆塚本 尚
中村 幸一郎 氏(静岡市歴史博物館館長)
松田 善代子 氏(愛知大学非常勤講師)
川口 円子 氏(静岡産業大学総合研究所客員研究員)
久保田 裕道 氏(東京文化財研究所無形文化遺産部
無形民俗文化財研究室長)
鈴木 昂大 氏(国立民族学博物館人類学研究所助教)
富山 昭 氏(元静岡市文化財保護課調査員)
外立 ますみ 氏(愛知大学非常勤講師、トリー工業代表)

調査報告書は、5月初旬以降に市内各図書館等でご覧いただけます！

※由比北田地区では現在「天王舟」の看板を使用していますが、本報告会では記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択された由比北田の天王船流しについてご説明いたします。

問合せ 静岡市観光交流化局 文化財課 TEL 054-221-1066 主催 静岡市

報告会の告知（静岡市のHPより）



報告会会場の静岡市由比生涯学習交流館



北田にある北野天神宮



天神宮境内に鎮座する津島神社

(3) 思川の流しびな（観晃橋下流思川河畔（栃木県小山市））

夏にお雛様を流す行事があるとわかり、2022年に訪問を試みて小山市役所産業観光部商業課に照会をしたところ、コロナ禍で関係者のみで行われるとのことで断念をしていた経緯がある。その際、行事の由来等についても照会をしていたが、主催者である「思川の流しびな保存会」からの回答が市役所から送られてきていたので、抜粋して紹介する。

◆思川の流しびなについて

流しびなは源氏物語にも描かれているように古来からの風習です。自分の身代わりとなる人形（ひとがた）を舟に乗せて海や川に流すことで身に付いた汚れや不幸を取り除くといわれております。陰陽思想から日を選んで禊ぎをするのですが、ひな祭りに合わせるようになったのは後のことです。

思川の流しびなは下野しぼり和紙で作ることによって特別な思いが込められております。奈良時代に道鏡によって下野の国（栃木県）に伝えられたという下野しぼり和紙は悪を絞り出し幸せをもたらすと信じられ、それを使ってひとがたを作り流すのはこの地域独特の風習です。いつしか忘れられていたのを昭和34年に諏訪重雄、志津子が復活させました。それが7月始めだったのは2人の出会いの時期であり夏越の払いと七夕に合わせることで流しびな本来の役目が明確になったからだと思います。小山市は歴史的理由から七夕飾りをしない風習がありました。その時期に願いを込める対象として流しびなが喜ばれたこともあり、夏の風物詩として定着しました。（後略）

とのことであり、本来はひな祭りの時期の行事であったのが、夏越の祓いと七夕に合わせて行う様が変わったようである。各地にある流しびなの意味合いや由来なども、七夕と絡めた視点で見直してみると、また新たなものが見えているかもしれない。

流しびなは2023年に4年ぶりに完全な形で開催された。行事が行われた7月2日は日差しが痛いほどの快晴であった。場所は、小山市内を流れる思川の見晃橋の下の右岸にて。10時過ぎから市長のあいさつや楽団の演奏に続き、流しびなが始まった。保存会が作成して会場で配布されたひな人形を、川に作られたはしけから、地元の子どもたちが願いを込めて流す。流されたひなは、下流で見守る人に拾われたり、主催者によって回収されたりしていた。河川敷ではフードカーが出るなどのイベントも行われており、64回を数える夏

の風物詩として定着しているようだった。その後のニュースによると、回収されたひな人形は、9月14日に市内の須賀神社で、人形を流した人の穢れを祓い、願いが叶うようにと祈りを込めた清祓いが行われお焚き上げされたようである。

保存会から頂いた回答は以下のように締めくくられている。

思川の流しびなは日本古来の風習と栃木県伝統工芸で小山市無形文化財の下野しぼりを後世まで伝える役割も担っております。そのためにたくさんの方々に体験していただき、流しびなを心の故郷にしてもらえたらと願っております。

流しびなは、「下野人形（しもつけひとがた）」と呼ばれ、「下野しぼり」という小山市の無形文化財に指定されている伝統的技法で加工された「下野しぼり和紙」で作られている。「下野しぼり和紙」は、表面のしぼり目の凹凸により光の反射が変わり、ほかの和紙と比べて柄が立体的に見えるという特徴がある。人形は、およそ1か月前から、思川の流しびな保存会のメンバーが手作りするようである。行事と工芸品という二つの伝統が末永く続くことを祈るばかりである。



「下野しぼり」で作られたひな人形たち、帯や髪の毛など細かく作られている



流れゆくひな人形に祈りを込める



ひな人形が流される思川

(4) 荒木のねつおくり祭り (富山県南砺市荒木地区)

毎年、夏の土用の三日目(2023年は7月22日)に南砺市内の荒木地区で行われている七夕行事。稲の熱であるイモチ病や病害虫を取り払い、五穀豊穡や豊作祈願をする。1688(元禄元)年に始まったと伝えられ、その頃からの形態がそのままに伝えられている貴重な民俗行事。地区の小学生が中心となって、「じじ、ばば」と呼ばれるわら人形を乗せた田の神舟(紙で作った張り子の舟)を担いで荒木地区内の田んぼをすべて回る。「おくるばーい おくるばーい、ねつおくるばーい」と太鼓の音に合わせて唄い囃しながら、五色の短冊で飾った笹竹で田んぼの稲穂の先を払う。最後に、田の神舟や笹飾りを、福吉橋から小矢部川へ投げ込んで終了する。川へ流すのは、禊や祓いの行為として、ケガレや病害虫を流し去る意味がある。

2012年7月21日に一度訪問をしたことがあるが、途中から大雨となり、行事の半ばで子どもたちは参加を中止した。大人が数名軽トラックで、子どもたちが手にしていた笹飾りを運び、福吉橋の上から小矢部川に降ろして回収をして終了という中途半端な形であった。開催が土曜日やコロナ明けという事もあり、実に11年ぶりの再訪となった。到着した午前中は、荒木地区とは線路と小矢部川を挟んで反対側の市内にある宇佐八幡へと向かった。ここでは、11時頃から熱送り太鼓が奉納されるとのことであった。10時半ころに到着すると既に太鼓を載せたリアカー二台が到着して、熱送り太鼓が鳴らされていた。11時には神社を出て、何処ともなくリアカーの集団は去って行った。昼食をとり、荒木地区へ移動。11年前に、子どもたちが集まっていた公民館のあたりを訪ねたが公民館がない。集落が整備されたようで、いささか慌てながら周囲を探すと、2,300mくらい離れた場所に荒木地区会館という新しい建物があり、そこに参加者が集合していた。

13時少し前に一行は会館を出発。子どもたちの数は40人くらい、付き添いの大人たちが30人くらいである。熱送りと書かれた旗を先頭に手に手に笹飾りを持った子どもたちが続き、七夕飾りがあしらわれた太鼓の載せられたリアカー二台が最後尾である。道中、太鼓が打ち鳴らされて一行は進んでいき、要所要所の田んぼの脇に止まると、「ねつおくるばーい」と歌いながら、笹飾りで水田の稲穂をさする。そんな事を繰り返して、14時半ころに最後の田んぼで熱送りをした後、一行はJR城端線を超えて駅前まで小休止。小矢部川沿いに歩いて、15時20分過ぎに福吉橋に到着した。そこで、対岸から先に到着していた別のチームと、熱送り太鼓を叩きあう。その間に、子どもたちは笹飾りを川岸に投げおろしていく。昔は小矢部川に直接投げ込んで、穢れや病害虫を流してくれるという事であったが、環境への配慮から今は川に流したことにして橋の下に投下し、大人が回収をしている。最後に、じじばばの乗った船「荒木丸」をロープにつないで橋の下におろし、それが回収され、15時半には一連の行事が終了した。

ろうそくもらいとは直接的には関連性が今のところは見受けられない、虫送り系の七夕行事ではあるが、久しぶりに一つの行事を最後まで見届けることができ、11年来の思いをかなえることができた。南砺の南隣、砺波市は、開拓期に伊達市に入植した母方の祖母の出身地である。四代前の先祖が暮らしていた郷里の平野で行われる七夕行事という事もあり感慨深い。そういった関係もあり、富山県での七夕調査は数が必然と多くなっている。どこかで、ろうそくもらいのルーツである行事に出逢えることを期待しつつ、富山県での調査も可能な限り続けて行ければと思う。



市内には豪華な七夕飾りが



市内の宇佐八幡宮



八幡宮で鳴らされる熱送り太鼓



じじばば、はイザナギ・イザナミだという



こうして地区内を練り歩く



福吉橋から飾りや荒木丸を下ろして終了する

第五章 今後の動き

第二期は、アイヌ民族の星の文化に関する調査研究が大きな柱である。二年目以降も主軸はそこに置きながらも、ろうそくもらいと七夕の調査も継続をしていく。七夕の時期には現地へ赴いて行事を見たり、それ以外の時期は北海道内の市町村町史を中心とした文献の調査を行ったりする。

(1) アイヌ民族の宇宙観研究のためのデータベースの構築

第二章でも書いたように、文献を中心とした調査、そこで得られた事例の分類、一覧化、マッピングが今期の大きな目標である。そこで、今年度も振り返りながら、第二期の工程を図にしてみた。研究会の開催は第一期や 2023 年度からの類推であり、確定しているわけではない。天文民俗班のオンライン定例ミーティングも然りである。

初年度 (2023年4月～2024年3月)													備考
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
調査・収集	随時、先行研究、文献やHP等の情報を中心に											初年度は、調査収集を中心としながら、現状の問題点の洗い出しと以降の目的の設定。	
整理・分類													
考察													
報告			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
DB作成													
二年度 (2024年4月～2025年3月)													備考
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
調査・収集	随時、先行研究、文献やHP等の情報を中心に											基本的には机上の調査と収集が中心。	
整理・分類	随時、調査収集事例を項目ごとに分けていく											当初は分類する項目建てを行い、そこに収集事例を当てはめていく。DB作成の項目の指標ともする。	
考察													
報告	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
DB作成	分類項目をDBと連動して検討											8月は第8回考古会議、12月は第9回考古会議(予定)、2月は二年度報告書。それ以外は毎月のオンライン定例報告会。	
三年度 (2025年4月～2026年3月)													備考
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
調査・収集	随時、先行研究、文献やHP等の情報を中心に												
整理・分類	随時、調査収集事例を項目ごとに分けていく												
考察	随時、上記と並行して宇宙観の考察												
報告	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
DB作成	試行段階ではあるがDBの作成に着手											試行錯誤をして進めて行く。報告や会議のタイミングで各位に評価を頂く。	
最終年度 (2026年4月～2027年3月)													備考
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
調査・収集	随時、先行研究、文献やHP等の情報を中心に			補足調査									
整理・分類	随時、調査収集事例を項目ごとに分けていく												
考察	考察のまとめ												
報告	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
DB作成	完成に向けてフェーズ1			完成に向けてフェーズ2			最終調整						
												8月は第12回考古会議(予定)、12月は第13回考古会議(予定)、2月は二年度報告書。それ以外は毎月のオンライン定例報告会。	
												最終会議で完成品を見ていただき、不具合等を修正。	

2024 年は、8 月に伊達市での考古研究会の開催が決定しているので、そこでの研究発表に向けての準備や報告のまとめが前半の活動の中心となつてこよう。現在、アイヌ民族の星の文化の研究をされている方など、個別に声をかけているところである。

テーマ的には、第二章でも書いてはいるが、下記に力を入れたい。

- ・日食の祈りや単語、伝説等の事例をテーマの一つとして研究し、2030年の北海道金環日食で活用できる資産の形につなげていく。
- ・神話や伝承も可能な限り収集して分類化、一覧化する。
- ・北海道内の星が落ちたアイヌ語地名の現地調査を可能であれば3年目には行いたい。

(2) 北海道のろうそくもらい行事を対象とした天文民俗の文化伝搬に関する調査

今年度は、数十年ぶりに街を練り歩く「ろうそくもらい」と再会できた。そこで得られたのは、旭川というキーワードである。今後、調査のフィールドや入植者の流れなどは、函館、小樽、旭川の三つに絞って見て行くと良いかもしれない。ただ、第一期の文献調査では、日本海側に鯨漁との関連性、空知地方は炭鉱開発と鉄道開通との関連性もうかがい知れた。そういう意味では、5つの地域の比較をしていくと良いのかもしれない。2024年は、8月の研究会に向けてアイヌ民族関連に力を割くことになるが、下記の行事には是非とも足を運びたいところである。

- ・久見地区の星祭り（島根県隠岐郡隠岐の島町久見地区） 8月10日（金）：

子どもたちが星型の提燈を持って集落を練り歩く。古屋さんが伺った、日本玩具博物館の学芸員の方の話によると「ろうそくもらいに通じる行事の一番西」のように思われるとのこと。2023年はコロナ明けで4年ぶりに開催されているので、24年以降も何もなければ開催されるはず。旧暦で行われるので2024年は8月10日。夏季休暇の頭に行けるとは思うのだが、研究会の日程次第では厳しいかもしれない。

- ・函館のろうそくもらい 7月7日（日）：

日曜日なので行ける可能性は高い。函館系の歌と行事を直接見たことがないので、是非とも訪問したいところである。事前に函館市にどこで行われているかの事前調査をしたうえで、今年の南円山地区の様に行動したい。

(3) 各地の七夕民俗調査

昨年訪ねていない由比北田の天王船流しは是非とも足を運びたい。関連して、天王船系の行事の日にちが分散しているので、本家である愛知の津島神社や、関東圏で比較的無理なく行ける江ノ島と真鶴の行事にも赴きたいところである。7月、8月の七夕行事でタイミングが合えば赴きたいところだが、地方の行事はなかなか決まるのが遅いこともあるので、直前の行動になる可能性があるが、時期が関係のない村松浜の小学校には、七夕舟を拝見しに行ければと思う。以下は、天王船系の行事である。

- ・江の島天王祭の神幸祭（神奈川県藤沢市） 7月14日（日）
- ・由比北田の天王船流し（静岡県静岡市清水区由比北田） 7月20日（土）
- ・真鶴 貴船祭り（神奈川県足柄下郡真鶴町） 7月26日（金）
- ・尾張津島天王祭（愛知県津島市神明朝津島神社） 7月27日（土）、28日（日）

以上